

## 山形城下町商人長谷川吉郎治家における紅花取引の実態

— 嘉永・安政期を中心に —

岩 田 浩太郎

(文化システム専攻歴史文化領域担当)

## はじめに

本稿は、山形城下町商人長谷川吉郎治家の紅花取引の実態についてあきらかにすることを課題とする。

山形城下十日町の<sup>①</sup>長谷川吉郎治家は、山形水野藩の土格御用達に任ぜられ、幕末期の山形城下町において随一の経営規模を誇る巨大商人として活躍した商家である。近世後期・明治期における長谷川家の活動が山形藩政・山形県政をはじめ奥羽・東北地方（とくに東北中央・南部）の政治・経済・社会の諸動向に与えた影響は大きく、その経営や活動の解明はひろく東北近世史・近代史研究の進展のために重要な課題であるといつても過言ではない。

従来、<sup>②</sup>長谷川家の経営に関しては、今田信一氏が名著『最上紅花史の研究』において、同家の有力な出荷先であった京都紅花問屋最上屋喜八家の帳簿に出てくる同家の取引記録を用いてその紅花取引の規模や集荷に関する分析をおこなっているのが唯一の実証的成果である。同家の紅花集荷が仙南地方を中心に展開されていたことを指摘した先駆的研究である。<sup>③</sup>しかし後述するように、同家は最上屋のほか、さらに広汎な京都・大坂の紅花問屋と取り引きしており、先行研究の予想をはるかにこえた内容と規模で紅花流通に関与していた。また、<sup>④</sup>長谷川家は紅花のほか、

青芋・生糸などを奥羽で買い付け上方に送り販売し、上方より呉服太物・古手や繰綿・蠟・砂糖・荒物・小間物などを仕入れ奥羽に売り捌く巨大な「のこぎり商い」を実施する一方、金融・地主・鉱山などの経営も手広く実施していたと考えられる。新史料の発掘を進め、同家の多角経営の構造や地域の政治・経済・社会に対するヘゲモニーの実態に関する総合的研究を実施していくことが望まれる。本稿はこの課題の一環に位置づくものであり、まずその紅花取引の実態解明に焦点を絞り実証研究をおこなうものである。<sup>⑤</sup>

本稿では、宮城県柴田郡村田町<sup>⑥</sup>正<sup>⑦</sup>大沼正治郎家に所蔵されている長谷川吉郎治家作成の紅花取引帳簿などを用いて、嘉永・安政初年における紅花取引の規模と内容をあきらかにする。とくに、<sup>⑧</sup>長谷川家が紅花取引をおこなう際に基盤とした産地の地域範囲と集荷・出荷を担当した商人や組合形態の検証、取り扱った紅花荷の数量と原価・代金・純益の実態、などの考察をおこない、従来不明確であった同家の紅花取引の全体像に関する基礎的な事実確定の作業をおこないたい。

従来、山形城下町商業の奥羽にまたがる広域的な取引については言及がなされることがあるが、具体的な実証研究は進んでいない。山形城下町商人に関する論述も多くあるが、個別商人経営の研究は少ないのが現状である。<sup>⑨</sup>山形城下町には様々な経営規模の商人がおり、階層性が認め

られる。本稿は山形城下町商人のなかでも随一の巨大商人に関する研究であり、ある意味では特異な位置にある商人研究となるが、幕末期の山形城下町商人の経営実態と活動条件をその頂点的なレベルにおいて典型的にあきらかにする事例として重要であると思われる。また、本稿で取り上げる紅花取引史料は、ある個別の商人が一年間に出荷した紅花荷のほぼ全量を把握し、その産地や原価・販売価格・利益の実態を子細にあきらかにしうるデータとして重要であり、今後の山形城下町商人研究や全国の紅花流通史研究にとっても一つの比較の基準となると思われる。そのため煩瑣ではあるが網羅的な表を作成し、ひろく研究者の共通データとして供することとした。

## 一 分析史料の性格

本稿の分析に主に用いる史料は、正大沼家に所蔵されている㊤長谷川家作成の文書群である。表題は、I 嘉永二年「西為登紅花元揚調帳」（裏表紙「長谷川吉郎治」）、II 嘉永三庚戌年九月吉日「為登紅花元揚り取調帳」（裏表紙「㊤長谷川吉郎治」）、III 嘉永五年九月吉日「子夏為登紅花青苧絹糸調」（裏表紙「長谷川吉郎治」）、IV 安政二卯年二月吉日調「寅夏ら卯暮迄為登紅花青苧絹糸元揚り調」（裏表紙「長谷川吉郎治 上京倅吉六」）、などである。

これらは〈紅花等元揚調帳〉とでも総称できる文書群である。すなわち、上方へ登らせた紅花荷や青苧荷・生糸荷の元揚り（買揚り。商品の元値（原価）がいくらであつたのか）を各荷毎に調べ書き上げた帳面である。これらの帳面では、元値（原価）は単位あたり（紅花であれば一駄Ⅱ六四袋あたり）で換算表示されている。〈紅花等元揚調帳〉に記載されている単位あたり元値（原価）とは、IⅡIIIの帳面の場合は京着値である（一部の荷については素上り値）。京着値とは、紅花荷の場合、産

地より買い入れ運送し京都紅花問屋に到着する迄に要した総原価を一駄あたりに換算し表示した数値をさす。<sup>⑤</sup>

IVの帳面の場合は、各荷の単位あたり元値の表示につき異なる方法を用いている。京着値の記載は一部の紅花荷にとどまり、むしろ多くの紅花荷については素上り（素揚り）値が記載されている。京着値と素上り値の違いは、後者が産地での買代金（仕入原価）を一駄あたりに換算して表示したものであるのに対して、前者は産地での買代金のほか、仲買人へ支払った口銭や荷造り費用・領主に納めた出荷役金・流通過程における運賃などを合算し、それを単位あたりに換算表示したものであることに求められる。IVの帳面では、素上り（単位あたり買代金）に含まれていない諸経費については個別の紅花荷の記載の後の末尾に一括して計上し、買代金の合計と合算して原価合計を算出するという方式がとられている点特徴である。

IとIVの帳面につき記載様式を例示し、具体的に検討したい。

〔史料Ⅱ〕 I 嘉永二年「西為登紅花元揚調帳」の冒頭部分（後掲表1番号

1Ⅱ49の部分）

最上紅花

内造り分

京着

金五拾九両永拾匁分かへ

本 百三拾壹袋 拾九入四丸  
 緋 拾八入三丸

直打（朱書）

金六七両かへ（朱書）

（以下、紅花四八荷（後掲表1番号2Ⅱ49）略）

袋数

〆 四千八百八袋

表1 嘉永2年(1849)長谷川吉郎治家の紅花荷一覽

【表1-1】

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値	一駄あたり 値打	一駄あたり 仕切値段	一駄あたり 手取現金	原価	代金	純益	備考
		袋	両	両	両	両	両	両	両	
①	内造り分									
1	㊥本緋	131	59.10	67.00	62.50	61.56	120.97	127.93	6.96	
2	㊥谷風	101	48.364	58.50	54.00	53.19	76.32	83.94	7.62	
3	㊥佐印	173	58.77	66.00	64.00	63.04	158.86	170.41	11.55	
4	㊥司印	83	52.90	63.00	58.00	57.13	68.60	74.09	5.49	
5	㊥冲姫	153	50.425	61.50	—	—	120.55	—	—	此分厚姫おし込揚
6	㊥厚姫	80	50.425	61.00	56.00	55.16	63.03	68.95	5.92	此分冲姫おし込揚
7	㊥紅飛	90	52.40	63.50	56.00	55.16	73.69	77.57	3.88	
	㊥紅飛	10	52.40	63.50	57.00	56.15	8.19	8.77	0.58	
8	㊥元勇	169	55.976	66.00	62.00	61.07	147.81	161.26	13.45	
9	㊥極緋	73	47.605	57.00	—	—	54.30	—	—	
10	㊥佐印	148	60.25	70.00	66.50	65.50	139.33	151.47	12.14	
11	㊥寒紅	72	54.84	65.50	60.50	59.59	61.70	67.04	5.34	
12	㊥緋紅	89	51.868	61.00	57.00	56.15	72.13	78.08	5.95	
13	㊥緋柳	74	47.73	59.50	53.50	52.70	53.70	60.93	7.23	
14	㊥雨揃	107	53.89	63.50	59.00	58.12	90.10	97.17	7.07	
15	㊥大頭	80	55.75	66.00	62.00	61.07	69.69	76.34	6.65	附花無之直打駈と相訳り兼候
16	㊥寺新	70	49.50	62.50	—	—	54.14	—	—	
17	㊥朝日	73	46.41	55.00	52.00	51.22	52.94	58.42	5.48	
18	㊥前頭	82	52.12	62.50	57.00	56.15	66.78	71.94	5.16	
19	㊥宝雨	143	46.705	58.00	52.00	51.22	104.36	114.44	10.08	
20	㊥大山	72	47.84	60.00	54.00	53.19	53.82	59.84	6.02	
	㊥大山	73	47.84	60.00	55.00	54.18	54.57	61.80	7.23	
21	㊥大紅	82	49.203	62.00	57.00	56.15	63.04	71.94	8.90	
22	㊥金狸々	91	51.066	63.50	54.00	53.19	72.61	75.63	3.02	
23	㊥村雨	108	43.20	53.00	52.00	51.22	72.90	86.43	13.82	
24	㊥冲雨	92	45.787	51.00	50.00	49.25	65.82	70.80	4.98	
25	㊥吉光	99	51.365	60.00	57.00	56.15	78.92	86.86	7.94	
26	㊥新光	123	51.016	62.00	58.00	57.13	98.05	109.80	11.75	
27	㊥金冠	75	57.50	67.00	62.00	61.07	67.38	71.57	4.19	
28	㊥生月	86	54.856	63.50	59.00	58.12	73.71	78.10	4.39	
29	㊥国司	83	55.477	65.00	59.00	58.12	71.95	75.37	3.42	
30	㊥飛稀	78	56.93	66.00	63.00	62.06	69.38	75.64	6.26	
31	㊥大門	106	49.35	59.00	55.50	54.67	81.74	90.55	8.81	
32	㊥大極	102	55.39	66.50	58.00	57.13	88.28	91.05	2.77	
33	㊥金時	68	55.79	66.00	—	—	59.28	—	—	難事分
34	㊥最上川	68	55.571	66.50	18袋 61.00	60.09	59.04	18袋 16.90	—	難事分
35	㊥西光	29	50.321	62.00	60.00	59.10	22.80	26.78	3.98	
36	㊥灰龍	95	50.32	55.00	—	—	74.69	—	—	難事分
37	㊥辰雨	64	41.25	49.00	44.00	43.34	41.25	43.34	2.09	
38	㊥紅馬	31	31.00	—	43.00	42.36	15.02	20.52	5.50	
39	㊥仙岩	27	55.86	67.00	62.00	61.07	23.57	25.76	2.19	
40	㊥灰光	115	57.10	67.00	63.00	62.06	102.60	111.51	8.91	
41	㊥灰光	180	57.10	65.00	63.00	62.06	160.59	174.54	13.95	
42	㊥灰光	152	57.10	65.00	—	—	135.61	—	—	
43	㊥并佐印	77	57.10	67.00	62.00	61.07	68.70	73.47	4.77	
44	㊥灰光	114	56.648	65.00	63.00	62.06	100.90	110.54	9.64	
45	㊥灰福	126	51.32	60.00	59.00	58.12	101.04	114.42	13.38	
46	㊥極旭	79	52.34	62.00	57.00	56.15	64.61	69.31	4.70	
47	㊥市娘	89	56.79	67.00	62.00	61.07	78.97	84.93	5.96	
48	㊥清光	109	53.091	63.00	56.00	55.16	90.42	93.94	3.52	
49	㊥寺正	121	51.739	60.00	58.00	57.13	97.82	108.01	10.19	
	袋数	4808								右之袋数内造り出荷分
②	天神湯沢 川嶋屋権吉殿造り出荷分 最上紅花									
50	㊥吉飛	66	58.11	68.50	62.50	61.56	59.93	63.48	3.55	
51	㊥吉仁	79	59.13	68.00	63.00	62.06	72.99	76.61	3.62	
52	㊥吉司	102	58.616	67.00	60.00	59.10	93.42	94.19	0.77	
53	㊥吉斎	67	57.75	68.00	63.00	62.06	60.46	64.97	4.51	
54	㊥谷稀	76	54.34	65.00	57.00	56.15	64.53	66.68	2.15	
55	㊥大稀	76	57.077	68.50	63.00	62.06	67.78	73.70	5.92	
56	㊥名山	76	49.08	57.00	55.00	54.18	58.28	64.34	6.06	
	袋数	540								
③	大町村 六右衛門殿出荷分									
57	㊥荒馬	82	50.077	62.00	57.00	56.15	64.16	71.94	7.78	
58	㊥大緋	126	52.184	63.00	58.00	57.13	102.74	112.47	9.73	
	袋数	208								

【表1-2】

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値	一駄あたり 値打	一駄あたり 仕切値段	一駄あたり 手取現金	原価	代金	純益	備考
		袋	両	両	両	両	両	両	両	
④	天童 高木屋七兵衛殿出荷分									
59	㊤山姥	72	51.834	61.00	59.00	58.12	58.31	65.39	7.08	
60	㊤国稀	75	50.21	61.00	55.00	54.18	58.84	63.49	4.65	
	袋数	147								
⑤	楯岡 青沼惣次殿買口出荷分									
61	㊤源氏山	73	49.463	57.00	54.00	53.19	56.42	60.67	4.25	
62	㊤猪王山	71	53.32	61.00	57.00	56.15	59.15	62.29	3.14	
63	㊤荒飛	67	52.96	63.00	58.00	57.13	55.44	59.81	4.37	
64	㊤大関	95	51.75	63.00	59.00	58.12	76.82	86.27	9.45	
	袋数	306								
⑥	内造り出荷 宝沢紅花									
65	㊤宝稀	145	二口均し 43.162	59.00	53.00	52.21	153.09	—	—	右之内 18入 4丸難事
66	㊤宝松	82	・ 43.162	56.00	52.00	51.22		—	—	
	袋数	227				諸経費込計		158.99	—	山形→大石田→京都
⑦	酒田 鐘屋惣右衛門殿造り分 庄内紅花									
67	㊤小町	121	41.135	—	48.00	47.28	77.77	89.39	11.62	
68	㊤森雨	117	42.64	—	52.00	51.22	77.95	93.64	15.69	
69	㊤宮雨	98	42.50	—	48.00	47.28	65.08	72.40	7.32	
70	㊤山錦	82	43.664	—	52.00	51.22	55.94	65.63	9.69	
	袋数	418								庄内→大坂→京都
⑧	与野 山田屋幸右衛門殿造り分 早庭紅花買口分									
71	㊤金時	75	72.00	—	78.00	76.83	84.38	90.04	5.66	全行（最上屋喜八行）
72	㊤鬼胆	76	70.00	—	78.00	76.83	83.13	91.24	8.11	全行
73	㊤玉紅	121	68.00	—	70.00	68.95	128.56	130.36	1.80	㊤行（綿屋勇蔵行）
74	㊤山姥	78	68.00	—	77.00	75.85	82.88	92.44	9.56	㊤行
75	㊤露玉	70	69.00	—	76.00	74.86	75.47	81.88	6.41	全行
76	㊤本金時	86	73.00	—	80.00	78.80	98.09	105.89	7.80	㊤行
77	㊤金司	69	70.00	—	—	—	75.47	—	—	㊤行
78	㊤鬼の子	72	69.50	—	75.00	73.88	78.19	83.12	4.93	㊤行
79	㊤蓮田	72	73.50	—	81.00	79.79	82.69	89.76	7.07	全行
80	㊤時頭	70	72.50	—	80.00	78.80	79.30	86.19	6.89	㊤行
81	㊤出勢	154	70.00	—	76.00	74.86	168.44	180.13	11.69	全行
82	㊤時光	75	69.00	—	72.00	70.92	80.86	83.11	2.25	㊤行
83	㊤正金	74	72.50	—	81.00	79.79	83.83	92.26	8.43	全行
84	㊤金遣	75	72.50	—	77.00	75.85	84.96	88.89	3.93	全行
85	㊤正鬼腕	172	74.25	—	84.00	82.74	199.55	222.36	22.81	全行
86	㊤末広	105	おし込 74.25	—	80.00	78.80	121.82	129.28	7.46	全行
87	㊤鬼腕	202	・ 74.00	—	80.50	79.29	233.56	250.26	16.70	㊤行
88	㊤天下一	145	・ 74.00	—	82.00	80.77	167.66	182.99	15.33	全行
89	㊤金冠	162	・ 74.00	—	80.00	78.80	187.31	199.46	12.15	㊤行
90	㊤本末広	166	74.00	—	80.50	79.29	191.94	205.66	13.72	㊤行
91	㊤本緋	74	70.00	—	77.50	76.34	80.94	88.27	7.33	㊤行
92	㊤二ノ腕	88	71.00	—	79.00	77.82	97.63	107.00	9.37	全行
93	㊤鬼娘	72	69.00	—	77.50	76.34	77.63	85.88	8.25	㊤行
94	㊤日ノ出	72	70.00	—	80.50	79.29	81.00	89.20	8.20	㊤行
95	㊤正宗	73	72.00	—	77.00	75.85	82.13	86.52	4.39	全行
96	㊤国一	73	70.00	—	77.50	76.34	79.84	87.08	7.24	㊤行
97	㊤本蓮田	66	73.00	—	82.00	80.77	75.28	83.29	8.01	全行
98	㊤本鬼腕	160	75.00	—	80.50	79.29	187.50	198.23	10.73	㊤行
99	㊤鬼頭	78	70.75	—	80.50	79.29	86.23	96.63	10.40	㊤行
100	㊤正蓮田	74	72.00	—	82.00	80.77	83.25	93.39	10.14	全行
101	㊤大頭	68	70.00	—	77.50	76.34	74.38	81.11	6.73	㊤行
102	㊤宮田川	69	70.00	—	75.50	74.37	75.47	80.18	4.71	全行
	袋数	3086								是まで与野町造り荷
⑨	桶川 木嶋屋浅五郎殿出荷分									
103	㊤孝緋	78	73.00	—	78.00	76.83	88.97	93.64	4.67	全行
104	㊤忠孝	92	69.00	—	76.00	74.86	99.19	107.61	8.42	全行
	袋数	170								桶川出荷
⑩	水戸買口分									
105	㊤国司	89	おし込 70.579	—	76.00	74.86	98.15	104.10	5.95	全行
106	㊤国撰	70	・ 70.579	—	76.00	74.86	77.20	81.88	4.68	全行
107	㊤国稀	64	・ 70.579	—	76.00	74.86	70.58	74.86	4.28	全行
	袋数	223								水戸出荷分
	三口合	3479								

【表1-3】

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値	一駄あたり 値打	一駄あたり 仕切値段	一駄あたり 手取現金	原価	代金	純益	備考
		袋	両	両	両	両	両	両	両	
⑪	奥仙紅花口 ㊤㊤組合分	仙台	得可	寿屋	徳蔵	殿買口				
108	㊤奥北	88	—	—	60.00	59.10	—	81.26	—	全行
109	㊤奥北	105	—	—	60.00	59.10	—	96.96	—	㊤行 (伊勢屋源助行)
110	㊤仙撰	66	—	—	—	—	—	—	—	㊤行 難事之分
	㊤仙撰	21	—	—	60.00	59.10	—	19.39	—	㊤行
111	㊤大原	126	—	—	58.00	57.13	—	112.47	—	全行
112	㊤宝峯	84	—	—	—	—	—	—	—	㊤行 難事之分
113	㊤羽衣	84	—	—	57.00	56.15	—	73.70	—	㊤行
	㊤羽衣	20	—	—	57.00	56.15	—	17.55	—	㊤行
114	㊤仙東	100	—	—	58.00	57.13	—	89.27	—	㊤行
115	㊤東錦	81	—	—	60.50	59.59	—	75.42	—	㊤行
116	㊤東錦	63	50.00	—	—	—	49.22	—	—	全行 難事之分
117	㊤村雨	23	—	—	22袋54.00	53.19	—	22袋18.28	—	全行 難事之分
118	㊤天晴	40	50.00	—	19袋54.00	53.19	—	19袋15.79	—	全行 難事之分
119	㊤村雨・天晴	21	50.00	—	—	—	16.41	—	—	全行 難事之分
	㊤袋数	922								
⑫	南部紅花買口 ㊤㊤組合分	黒沢尻	湊屋	専次郎	殿出し					
120	㊤金時・丸金	121	—	—	64.00	63.04	—	119.19	—	古長 (古手屋長右衛門) 殿行
121	㊤金札	234	—	—	—	62.00	—	226.69	—	古長殿行
122	㊤金札	234	—	—	—	—	—	—	—	古長殿行
123	㊤福紅	155	50.00	—	60.00	59.10	121.09	143.13	22.04	古長殿行
124	㊤福紅	155	—	—	—	—	—	—	—	古長殿行 難事之分
125	㊤男山	92	—	—	54.00	53.19	—	76.46	—	古長殿行
	㊤袋数	991								
⑬	南部紅花 ㊤分	長兵衛殿	買入之内							
126	㊤金冠	133	—	—	60.00	59.10	—	122.82	—	古長殿行
127	㊤村雨	176	50.00	—	88袋60.00	59.10	137.50	88袋81.26	—	古長殿行 難事之分
128	㊤丸金	149	—	—	58.00	57.13	—	133.01	—	古長殿行
	㊤袋数	458								
129	㊤舂沢	85	—	—	62.00	61.07	—	81.11	—	古長殿行
130	㊤小柳	102	—	—	62.00	61.07	—	97.33	—	古長殿行
	㊤袋数	187								
⑭	奥仙分 ㊤	長兵衛殿	買口							
131	㊤仙旭	118	—	—	60.00	59.10	—	108.97	—	古長殿行
132	㊤仙飛	92	—	—	54.00	53.19	—	76.46	—	古長殿行
133	㊤仙撰一	190	—	—	54.00	53.19	—	157.91	—	古長殿行
134	㊤仙壺	88	—	—	60.00	59.10	—	81.26	—	全
	㊤仙壺	88	—	—	60.00	59.10	—	81.26	—	㊤
	㊤仙壺	88	—	—	61.00	60.09	—	82.62	—	㊤ (西村屋清九郎)
	㊤袋数	664								
⑮	江俣村 鈴木屋	長四郎殿	組合分							
135	㊤紅旭	92	—	66.00	62.00	61.07	—	87.79	—	
136	㊤紅玉	76	—	66.00	60.00	59.10	—	70.18	—	
137	㊤石山	76	—	65.00	60.00	59.10	—	70.18	—	
138	㊤比良	36	—	57.00	56.00	55.16	—	31.03	—	
	㊤袋数	280								
⑯	南部跡買 ㊤㊤組合物									
139	㊤大廻	138	—	—	60.00	59.10	—	127.43	—	上物
140	㊤大森	139	—	—	60.00	59.10	—	128.36	—	上物
141	㊤宮森	116	—	—	—	—	—	—	—	上物
142	㊤大淀	184	—	—	58.00	57.13	—	164.25	—	上々
143	㊤荒馬	138	—	—	54.00	53.19	—	114.69	—	上々
144	㊤玉川	138	—	—	58.00	57.13	—	123.19	—	
145	㊤中内	138	—	—	—	—	—	—	—	
146	㊤立花	111	—	—	54.00	53.19	—	92.25	—	
147	㊤紅梅	207	—	—	54.00	53.19	—	172.04	—	
148	㊤黒岩	120	—	—	54.00	53.19	—	99.73	—	
149	㊤本丹瀬	92	—	—	60.00	59.10	—	84.96	—	南部第一大頭物上々
150	㊤新場	138	—	—	60.00	59.10	—	127.43	—	大頭物
151	㊤本光	69	—	—	60.00	59.10	—	63.72	—	上々
	㊤袋数	1728								仙台→江戸(井上)→大坂 →京都古手屋

【表1-4】

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値	一駄あたり 値打	一駄あたり 仕切値段	一駄あたり 手取現金	原価	代金	純益	備考
		袋	両	両	両	両	両	両	両	
⑰	南仙 飯洲惣吉殿松岡屋笹森買入分 ⑤企 ③三ツ割組合									
152	⑤仙輝	73	—	—	80.00	78.80	—	89.88	—	
153	⑤仙一	255	—	—	74.00	72.89	—	290.42	—	
154	⑤仙稀	83	—	—	74.00	72.89	—	94.53	—	
155	⑤仙紅	320	—	—	72.00	70.92	—	354.60	—	
156	⑤仙錦	159	—	—	72.00	70.92	—	176.19	—	
157	⑤仙谷	174	—	—	77.00	75.85	—	206.22	—	
158	⑤仙光	75	—	—	72.00	70.92	—	83.11	—	
159	⑤仙福	72	—	—	75.00	73.88	—	83.12	—	
160	⑤仙通	310	—	—	74.00	72.89	—	353.06	—	
161	⑤仙稀高	41	—	—	80.00	78.80	—	50.48	—	
162	⑤仙旭	23	—	—	72.00	70.92	—	25.49	—	
163	⑤仙一	13	—	—	—	—	—	—	—	
	⑤仙紅	12	—	—	—	—	—	—	—	
164	⑤仙輝	7	—	—	—	—	—	—	—	
	⑤仙稀	17	—	—	—	—	—	—	—	
165	⑤仙福	9	—	—	—	—	—	—	—	
	⑤仙光	12	—	—	—	—	—	—	—	
	⑤仙錦	5	—	—	—	—	—	—	—	
	Σ	1585								福嶋→江戸（井上）→大坂 →京都古手屋
⑱	西極月朔日出荷元上り造方覚									
166	⑤門伝	68	45.25	—	50.00	49.25	48.08	52.33	4.25	古長殿行
167	⑤門伝太紅	19	45.25	—	—	—	13.43	—	—	古長殿行
168	⑤太紅	70	47.00	—	54.00	53.19	51.41	58.18	6.77	古長殿行
169	⑤金冠	53	54.00	—	—	—	44.72	—	—	古長殿行
170	⑤金冠一光	21	54.00	—	—	—	17.72	—	—	古長殿行
171	⑤佐一	75	54.00	—	—	—	63.28	—	—	古長殿行
172	⑤佐一古今	19	54.00	—	—	—	16.03	—	—	古長殿行
173	⑤一光	90	45.50	—	50.00	49.25	63.98	69.26	5.28	古長殿行
174	⑤村紅	74	40.50	—	50.00	49.25	46.83	56.95	10.12	古長殿行
175	⑤村紅徳光	20	40.50	—	—	—	12.66	—	—	古長殿行
176	⑤金定	73	46.00	—	53.00	52.21	52.47	59.55	7.08	古長殿行
177	⑤金定徳光	20	46.00	—	—	—	14.38	—	—	古長殿行
178	⑤徳光	93	47.50	—	89袋55.00	54.18	69.02	75.34	6.32	古長殿行 村紅・金定印合
179	⑤古今	84	54.00	—	59.00	58.12	70.88	76.28	5.40	古長殿行
180	⑤極錦	68	47.60	—	—	—	50.58	—	—	鳴清（嶋屋清兵衛）殿行
181	⑤極錦長紅	19	47.60	—	—	—	14.13	—	—	鳴清殿行
182	⑤極揃	76	48.60	—	—	—	57.71	—	—	鳴清殿行
183	⑤長紅	65	40.50	—	—	—	41.13	—	—	鳴清殿行
184	⑤上清	80	44.50	—	52.50	51.72	55.63	64.65	9.02	鳴清殿行
185	⑤晴山	82	47.00	—	—	—	60.22	—	—	鳴清殿行
186	⑤源雨	70	48.00	—	53.00	52.21	52.50	57.10	4.60	最喜（最上屋喜八）殿行
187	⑤源雨藤雨	21	48.00	—	—	—	15.75	—	—	最喜殿行 ⑤印天童買入宿
188	⑤藤雨	71	46.25	—	51.00	50.24	51.31	55.74	4.43	最喜殿行
189	⑤平雨	102	47.00	—	52.00	51.22	74.91	81.63	6.72	最喜殿行
	合	1433								村山→江戸（井上）→大坂 →京都

典拠）嘉永2年「西為登紅花元揚調帳」・嘉永2年9月「紅花売日荷得簿」・嘉永2年正月「出張大宝恵」（宮城県栗田郡村田町大沼正治郎家文書）。  
嘉永元年「仕切帳」・嘉永3年正月「荷物高合帳」（山形大学附属図書館蔵最上屋喜八家文書）。

補注）\*1 小数点以下は10進法である。京着値を除き、原則として四捨五入により小数第2位までを表示した。史料にある永貫匁及び銀貫匁の記載は金に換算した。—は史料に記載がないなどの理由により不明であることを示す。

\*2 手取現金＝仕切値段×0.985。仕切値段の1.5%は歩半引（沓半引）と称する京都紅花屋の口銭として差し引かれている。荷によっては歩半引の率が若干異なる場合も確認できるが、本表では1.5%に統一して計算している。

\*3 原価＝袋数÷64×京着値。

\*4 代金＝袋数÷64×手取現金。

\*5 純益＝代金－原価、あるいは袋数÷64×（手取現金－京着値）。

\*6 番号7・20・110・113・134・163～165は本帳面では1つの荷物として記載されているが、異なる銘柄の合荷で銘柄毎の荷数が判明したり、同じ銘柄でも出荷後に上方での販売先や仕切値段が異なったり、海難事故などで一部の荷物が濡れたため扱いが異なった場合などのケースであるため、その内訳を区別して表示した。

\*7 番号65・66の紅花荷については一駄あたり京着値記載がなく、産地の村山郡宝沢から購入した時点での買代金（一駄あたり素上り）が記載されているため、京着値欄に斜体字で表示し一般の京着値と区別した。同様に、原価欄の斜体字の数字は、一駄あたり素上り×各荷物袋数÷64袋（1駄）で計算した番号65・66の数値の合計である。原価欄の斜体字数字の下にある諸経費込計とは、番号65・66の原価欄の斜体字数字に長谷川家（大沼家との組合）がこれらの荷を産地から購入した後に支出した諸経費（役金・荷造入用・運賃など）を足した合計（すなわち、これらの荷が京都に着くまでに要した原価の総計）である。帳面で計算され記載されている数値である。

\*8 番号①～⑧の集出荷形態は帳面の記載順に表示した。商人名などの表記法も帳面のままとした。ただし「得徳殿」「湊専殿」などの略称で書かれている商人名が判明する場合は本表で「得可寿屋徳蔵殿」と表示した。なお、「得可寿屋徳蔵」とは恵比寿屋徳蔵のことである。

\*9 備考欄に「難事分」と書かれている紅花荷は、破船により濡荷・半濡荷などになった荷物であることを示す。

## 丸数

㊦二百六拾丸半 此半分ハ企長雨造り合相成候事

右之袋数内造り出荷分

表1に表示したように、嘉永二年の㊦長谷川吉郎治家は様々な集出荷形態（紅花の集荷・出荷をおこなう商人および組合の形態）により大量の紅花を上方へ出荷したが、帳面の冒頭部分では、内造り分（㊦長谷川家の店組織が集出荷したもの）の紅花荷㊦四八〇八袋を書き上げている。最初の㊦本緋の荷印銘柄が付された百三十一袋の紅花荷につき記載を示したが、右肩部分にこの紅花荷に関する一駄あたりの京着値が書き込まれていることがわかる。また、左肩部分に朱書きで直打が書き込まれている。値打（直打）とはいわゆる指値（差値）のことであり、京都紅花問屋を介して西陣などの紅染屋（染職人）に紅花を販売する際の荷主側の売り付け希望値段を意味する。値打の数値も一駄あたりに換算して表記されている。Iの帳面の㊦大頭（表1の番号15）の箇所に「此分附花無之直打錠と相訳り兼候得共、大略見当金六拾六両かへ」と朱書きされていることから、値打は附花をもとにその品質などが査定され設定されたと考えられる。

表1から判明するように、Iの帳面では全ての紅花荷毎に荷印銘柄・荷数が記載され、奥州紅花を除く多くの紅花荷には京着値が記載されている。また、最上紅花のうち夏季出荷分については値打も記載されている。II・IIIの帳面でも京着値は奥州紅花を除いて記載されており、さらにIIの帳面では値打も記載されている。

すなわち、これらの帳面は出荷紅花を上方紅花市場で販売する際に活用する、いわば価格管理の台帳である。各荷の損益ラインや売値の目標数値を明確にする機能をもった。売り付け交渉をおこなうために上方へ派遣された㊦長谷川家の上京支配人（支配人・代理人などとも呼称）は、同

家が作成した帳面により各紅花荷の京着値（および値打）をふまえて京都紅花問屋に売り付けを委託し、あるいは問屋の立ち会いのもとで紅染屋と相対し、純益があるべく価格交渉をおこなった（京都紅花問屋に売の場合もしばしばみられた）。京都紅花市場における売り付け交渉は一駄あたりの値段でおこなわれたため、帳面もそれに対応すべく原価や希望売値も一駄あたりの京着値・値打で記載し、諸値段の比較対照が素早くできるように帳付けをしていたのである。

〔史料二〕IV安政二卯年二月吉日調「寅夏と卯暮迄為登紅花青苧絹糸元

揚り調」の冒頭部分（後掲表8番号1〜34の部分）

嘉永七寅夏

内造り紅花

金五拾三兩ト永廿六匁五分かへ

一、金貳百貳十貳兩貳朱

銀五匁三分

Ⓢ

光灰

貳百六十七  
廿八匁丸  
拾九八拾三丸

売金調

一、金七拾四兩<sup>六</sup>三歩ト

銀貳匁九分四<sup>四</sup>り

羽久殿売

廿八匁  
十九八匁 四丸

一、金八拾七兩<sup>六</sup>貳朱也

嶋清殿

灰光 九拾四

一、金八拾貳兩<sup>五</sup>六歩ト

同人

灰光 九拾五

㊦金貳百四拾四兩貳朱ト

五匁五分六<sup>六</sup>り

数㊦貳百六十七

(以下、紅花三三荷〔後掲表8番号2、34〕略)

袋数三千七百七十九袋 但し百八十九丸

外二造り合十一丸半

代金百丸半

代金式千六百四十壹兩三分ト

銀百廿四匁〇弍り

買口せん御役金

一、金百拾四兩三分ト

荷造り入用

銀廿匁五分三り

山形と京都迄太賃分

惣へ高如斯

合金式千七百五拾六兩式分ト

銀百四十四匁五分五り

口々売金調へ

一、金三千貳百廿六兩壹歩式朱ト

銀百三拾貳匁六分五り

IVの帳面の冒頭部分も内造り分の各紅花荷に関する記載から始まり、合計へ三七七九袋分の紅花荷が書き上げられている。最初の㊦灰光の荷印銘柄が付された二六七袋(二〇袋入の荷一丸と一九袋入の荷一三丸に荷造りされた)の紅花荷につき記載を示したが、右肩部分に記載された「金〇〇かへ」の表示は京着値ではなく、この帳面の場合、一駄あたり素上り(買代金)である。金二二兩二朱・銀五匁三分は、一駄あたり素上に荷物の駄数(二六七・六四)をかけて算出した㊦灰光二六七袋の

買代金である。

そして売金調からの部分には、㊦灰光二六七袋を売却した結果得た売代金が書かれている。売買に際して㊦灰光二六七袋は三つに分割され、うち七八袋は大坂紅花問屋羽州屋久右衛門を介して一駄あたり仕切値段六二兩で売り、九四袋は同じく大坂紅花問屋嶋屋清兵衛を介して一駄あたり仕切値段六〇兩で売り、九五袋も同人(嶋清殿)を介して一駄あたり仕切値段五六兩で売ったことが記録されている。この売金調にある三つの売代金は㊦長谷川家の正味手取りとなる金額であり、それぞれ(袋数・六四)×仕切値段×〇・九九の計算式で算出される金額である(売代金の一パーセントは各紅花問屋が口銭仲介世話料として差し引き取得した)。三つの売代金を合算した代金二四四兩二朱・銀五匁五分六厘が㊦灰光二六七袋の売却により長谷川家が実際に取得した売代金額である。他の各紅花荷についてもほぼ同様の記載様式により、荷印銘柄・荷数・一駄あたり素上り・買代金・一駄あたり仕切値段・売代金が記載されている。

内造り分の各紅花荷の記載が終わった末尾では、内造り分の袋数合計(袋数へ三七七九袋)・買代金合計(代金二六四一兩三分・銀一二四匁二厘)が算出された後、これまで個々の紅花荷の箇所では計上していなかった諸掛(買口銭・役金・荷造り費用・運賃など)が一括計上されている。買代金合計と諸掛合計(金一一四兩三分・銀二〇匁五分三厘)を合算して、内造り紅花三七七九袋が京都へ到着する迄に要した原価合計(合金二七五六兩二分・銀一四四匁五分五厘)が計算されている。その後、各荷の売代金を積算して得た内造り紅花分全体の売代金合計(金三二二六兩一分二朱・銀一三二匁六分五厘)が記されている。この売代金合計と原価合計を差し引けば、内造り紅花分の純益がすぐに計算できるようにになっている。こうした記載様式が他の集出荷形態の記録においても採用されていることが確認できる。



上京支配人は、IVの帳面の各集出荷形態毎の原価合計を紅花荷の駄数で割算することにより、各集出荷形態の平均京着値Ⅱ「ならし京着」を算出することが可能である。各荷毎の京着値と比較すれば「ならし京着」の数値は個々の荷のレベルでは誤差を含むことになるラフな数値であるが、価格交渉の際の損益ラインを大略把握する際の目安たりえた。その意味でIVの帳面もその表題（「元揚り調」）の通り「紅花等元揚調帳」の機能を有していたととらえられる。

一方、IVの帳面はⅠ・Ⅲの帳面とは記載様式を異にしている側面があり、これまで指摘したように、売却後に得られた売代金の情報も各紅花荷毎に記録し、各集出荷形態毎に売代金合計と原価合計を積算し記録する帳面として機能したと性格づけられる。IVの帳面の使用法を述べると、まず一定の間隔をあけ余白を確保しながら各荷毎の荷印銘柄・荷数・一駄あたり素上り・買代金を書き込み、当該荷の売却後に一駄あたり仕切値段や売代金計の情報を余白に書き加えていくという順序で使用されたと考えられる<sup>9)</sup>。

以上、本稿で主に使用する「紅花等元揚調帳」の記載様式の検討をおこない、その史料性格について考察した。先に示したように、Ⅰ・Ⅲの帳面の作成者名は長谷川吉郎治であり、IVの作成者名は長谷川吉郎治の倅吉六である<sup>8)</sup>。IVの帳面が従来の「紅花等元揚調帳」の機能に加えて、売代金を記録する機能を加え、原価合計と売代金合計の差引勘定をなす帳簿へとその様式が整えられたととらえられる。

これらの長谷川家作成の帳簿群が村田町の正大沼正治郎家に伝存していた理由は、嘉永く安政期に大沼正治郎（正初代）が長谷川家の上京支配人に任命され京都に派遣されて長谷川家の出荷紅花全体の売り付け交渉を担当していたことに求められると考える。正初代正治郎は、長谷川家と連携して奥州紅花の買い付けをおこなった企大沼正七家（現宮城県柴田郡村田町村田商人やましよう記念館）の三代目正七の弟であ

る。

後述するように、Ⅰの帳面には奥州紅花（⑤⑥組合紅花を含む）の荷数書上と嘉永二年の年末になって遅れて出荷した最上紅花の元揚り書上の二つの書上が括り付けられているが、それらの書付類には「元揚り京着値段朱を以書印」「荷着之砌何分二も御出精上直段御売払可被下候」など、⑤⑥両長谷川店より在京中の大沼正治郎に宛てた売り付け出精督励の指示があわせて書き込まれている。このことは、本節で考察したように、これら「紅花等元揚調帳」が上京支配人による紅花売り付け交渉のために活用されるべく荷主が作成した帳面であることを端的に示している。

## 二 嘉永二年の紅花取引の実態

表1・表2は、Ⅰ嘉永二年「西為登紅花元揚調帳」をもとに作成したものである。

表1は「史料1」で検討したⅠの帳面の記載をふまえて各紅花荷につき荷印銘柄・荷数・一駄あたり京着値・一駄あたり値打の数値を一覧にしたほか、各紅花荷の売却の結果、すなわち一駄あたり仕切値段などについても判明するものについては表示したものである。各荷の仕切値段や代金などはⅠの帳面には書かれていないが、幸い正大沼家文書に嘉永二年九月「紅花売日荷得簿」（裏表紙「仙台村田大沼屋庄治郎」・嘉永二年正月「出張大宝恵」（裏表紙「大沼屋庄二良」）があり、当時上方へ出張して紅花売り付けを担当した大沼正治郎が売却の結果などを記したこれらの帳面からほとんどの紅花荷について仕切値段が判明した。また、京都紅花問屋最上屋喜八家文書にある嘉永元年「仕切帳」・嘉永三年正月「荷物高合帳」<sup>10)</sup>からも、紅花荷のうち最上屋に送られた分の大半について仕切値段が判明した。荷主の帳面（Ⅰの帳面）に加えて、これら上京

支配人の帳面と京都紅花問屋の帳面をも用いて各紅花荷について子細に照合をおこない、確定できたデータを表1に表示した。なお、Iの帳面には裏表紙の後に、「南部跡買⑤組合物」「南仙飯淵惣吉殿松岡屋笹森買入分⑥企⑦三ツ割組合」が記載された書上と「酉極月朔日出荷元上り造方覚」が記載された書上の合計二つの書上が括り付けられている。これらは嘉永二年夏ではなく遅れて同年末などに集出荷された紅花に関する書上である。時期が遅れたなどの理由からIの帳面本体には書き込まれなかったと推察されるが、同じ嘉永二年の出荷紅花の荷数調あるいは元揚調の書上であることから同帳に括り付けられ保管されたと思われる。

このようにIの帳面は嘉永二年の夏為登Ⅱ通常出荷期に出荷した紅花を中心にその元揚調を記載したもので、遅れて集出荷された紅花荷については別の書上が作成され随時長谷川家から上京支配人へ送られたことがあきらかである。表1には、これら書上に記載された紅花荷についても表示した(番号⑬⑭⑮)。他にもこうした書上があった可能性、とくに奥州紅花の組合形態による出荷記録の一部につき遺漏がある可能性が存在しさらに史料発掘を進めるべきであるが、「紅花売日荷得簿」「出張大宝恵」など上京支配人や最上屋の仕切帳簿と照合した結果をふまえるならば、表1は同年に⑥長谷川家が上方へ出荷した紅花の全量に近い荷量を大略把握しているとの結論を得た。また表1からあきらかなように、奥州紅花および跡買の紅花については京着値などが記載されていないものが多く、産地・集出荷形態や集荷時期によって出荷紅花の価格管理の仕方に差異がみられたことも判明する。

表2は、表1の個別データを産地・集出荷形態別に整理・集計したものである(集計の方法などは、表2補注参照)。表2から、嘉永二年の⑥長谷川家の紅花取引の実態について、その特徴を考察しよう。

第一に、総荷数が一八三八一袋(二八七駄余)におよぶ極めて大量の紅花を⑥長谷川家は出荷しており、その集出荷に投下した資金も最上紅

花・庄内紅花・武州紅花・常州紅花分(総荷数の六四%余)の小計(原価I)だけで一〇三七三両余の巨額に達していたことが判明することである<sup>①</sup>。

第二に、産地から判明するように、⑥長谷川家の紅花集荷が羽州の村山・庄内、奥州の南部・奥仙・南仙、常州、武州という極めて広域におよんで実施されていたことである。産地別に荷数の割合をみると、最上紅花四三%余、奥州紅花三六%弱、武州紅花一八%弱の順に多く、この三地域で全体の九七%弱を占める。同家の集荷基盤がこれらの地域に置かれていたことが明確である。奥州紅花が全体の三分の一を超える割合を占めている点が注目され、その内訳をみると南部紅花(⑫⑬⑭)と仙台紅花(奥仙・南仙。⑪⑭⑮)の集荷量はほぼ均衡している(ただし、奥州紅花については、つぎにみるように組合形態Ⅱ共同出資による集出荷が多く、出資比率をもとに⑥長谷川家単独出資の紅花荷量を換算するならばその荷量は低くなる)。この年は、武州紅花の集荷量が比較的多い点も特徴である。

第三に、⑥長谷川家は自ら強大な集荷力を持つと同時に、組合など様々な形態を採用し各地の紅花商人と連携しながら広域的な集出荷機構を形成していたことが判明することである。まず、内造り(表2の集出荷形態の番号①②)による出荷は五〇三五袋(全体の二七%弱)、遅れて出荷した⑧の部分(うち石高木屋七兵衛造(表1の186、189)を除いた一一六九袋)も内造りであると判断され、これも合計すると六二〇四袋(三四%弱。いずれも最上紅花)となる。⑥長谷川家自身(長谷川店)が羽州村山郡に独自の集荷網を張り巡らし産地から大量の紅花買い付けを実現していたことが判明する(この点は次節も参照)。駄数で約九七駄に相当し、長谷川家が内造りのみでも抜群の荷量を取り扱う紅花商人であったことが判明する。

一方、荷量でほぼ三分の二にあたる紅花が産地の仲買商人を通して、

また組合形態により集出荷されている点が注目される。表2の産地・集出荷形態の順番で指摘すれば、羽州村山郡における②の天神湯ノ沢川嶋屋権吉、③の大町村六右衛門、④の天童町高木屋七兵衛、⑤の楯岡青沼惣次、⑥の江俣村長鈴木屋長四郎、羽州庄内における⑦酒田問屋鍔屋惣右衛門、武州における⑧与野宿山田屋幸右衛門、⑨桶川宿木嶋屋浅五郎、奥州における⑩仙台城下恵比寿屋徳蔵、⑪黒沢尻湊屋専次郎、⑫船岡飯淵惣吉などが、仲買にあたった産地紅花商人である。帳面でそれぞれ「造り分」「出荷分」「買口分」「買入分」などと記されているように、彼らは周辺産地より紅花を買い付け、荷造り・出荷を担当した。Ⅰ～Ⅳの帳面や諸史料を検討すると、彼らの集出荷した紅花の買代金・出荷役金・荷造り入用・運賃などの原価計は⑬長谷川家より精算されるところに、同家より彼らの取得となる仲買手数料Ⅱ買口銭が支払われていることが確認できる。この意味で、彼らは⑬長谷川家の仲買商人として位置付き同家を荷主とする集出荷に携わっていたことがあきらかである（彼らは長谷川店より「買入宿」とも呼称された。例えば、Ⅰの帳面に括られた「西極月朔日出荷元上り造方覚」の書上における町高木屋七兵衛の事例など）。また表1からあきらかなように、彼らが集出荷した紅花荷には―― 一部ではⅢなど仲買Ⅱ買入宿の荷印が付された場合もみられるが―― ほぼ荷印⑭が付され荷主が長谷川家であることが出荷当初から明示されたことが確認できる。

組合形態については、表2の順で述べれば、最上紅花に関する⑮の江俣村長鈴木屋長四郎、奥仙・南部・南仙紅花に関する⑪⑫⑬の山形十日町⑭長谷川吉内、南仙紅花に関する⑯村田企大沼正七が指摘でき、彼らが紅花の集出荷を⑬長谷川家と組み合い、共同出資で実施したことがあきらかとなる。⑰では「⑬企⑮三ツ割組合」と記されているが、これは⑬長谷川吉郎治・企大沼正七・⑭長谷川吉内の三家で出荷紅花の原価計を「三ツ割」Ⅱ三分の一ずつ負担し、代金も均等に三分の一ずつ分配

し取得するという組合形態である。組合形態の場合、⑮の長鈴木屋長四郎のように、共同出資者が集出荷の実務を兼ねる場合もあるが、⑪⑫⑬の記述から確認できるように共同出資者と仲買人とが別であるケースがみられる。⑰の「⑬企⑮三ツ割組合」の場合で検討すれば、先述の三家が共同出資者であり、集出荷の実務は船岡の飯淵惣吉らが担当している。組合形態の紅花荷印に関しては⑭印のほか、表1の⑪⑫の紅花荷は⑭印、⑮は⑭印が付けられたように、共同出資者の屋印が荷印として使用されるケースもある。⑪⑫の紅花荷に⑭印が付されたのは、共同出資者のなかでも⑬長谷川吉内がイニシアチブをとり仲買人などを動員してそれらの集出荷を実現したことを示している。

表2から判明するように、奥州紅花の荷量に占める組合花（⑪⑫⑬⑰）の比率は七九・九七％であり、極めて高い。このように⑬長谷川家は、とくに奥州紅花の買い付けにおいて組合形態Ⅱ共同出資の方式を多用し、南部・奥仙・南仙地方に対する集出荷機構を形成していたことが確認できる。

つぎに、嘉永二年の紅花売買と利益の実態について検討しよう。まず、表2の小計より最上紅花・庄内紅花・武州紅花・常州紅花をあわせた利益率をみると八・六三％である。奥州紅花に関しては一部の荷で一八％台の高利益率の販売結果があきらかとなるが多くの不明である。産地別に検討すると、庄内紅花が一六・〇二％と最も高いことが注目され、続いて最上紅花八・八九％、武州紅花七・八五％、常州紅花六・〇六％と続く。純益の額でみると、荷量にも規定されて最上紅花・武州紅花の販売が（不明の奥州紅花とともに）同家の紅花収益の基盤であることがわかる。一九世紀の京都紅花市場における一般的動向として、最上紅花の仕切相場は他産地紅花と比較して常に最下位を推移しており、その利益率も一八世紀段階と比較して低下したと把握できるが、表2の販売実績においては最上紅花の利益率が武州紅花を上回っている点が注目できる。

表3 嘉永3年(1850)長谷川吉郎治家の紅花荷一覧(最上紅花分)

【表3-1】

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値	一駄あたり 値打	原価	備考(仕入地など)
		袋	両	両	両	
①	内造り分					
1	㊤極緋	84	45.938	56.0	60.29	山形地廻り前田村買入百姓手干
2	㊤沖姫	90	50.68	61.5	71.27	山形地廻り沖原村買入百姓手干
3	㊤司印	98	54.50	62.5	83.45	中通文右衛門新田村百姓手干
4	㊤司紅	106	52.865	60.0	87.56	山形廻り印役 中通文右衛門新田村合
5	㊤重司	77	52.293	64.0	62.92	山形廻り十文字村百姓手干 中通長崎村合
6	㊤重紅	72	49.771	59.0	55.99	山形廻り十文字村買入 但百姓手干
7	㊤谷風	99	50.878	59.0	78.70	山形ろ二り半先風間村百姓干
8	㊤緋柳	77	49.75	59.0	59.86	山形廻り青柳村百姓買入分
9	㊤雨揃	184	52.245	64.0	150.20	山形ろ二り先キ志村買入百姓手干
10	㊤小町紅	86	53.02	65.0	71.24	青柳村百姓寄買入撰品
11	㊤長司	170	49.862	59.0	132.44	長町村百姓買入
12	㊤名月	102	57.137	67.0	91.06	最上川通寺津撰買入分上品也
13	㊤灰光	213	55.952	65.0	186.22	最上川通灰塚村百姓干分
14	㊤金冠	179	56.425	63.0	157.81	最上川通元桶村買入百姓寄買撰抜分上品
15	㊤小柳	87	49.423	59.0	67.18	山形廻り青柳村百姓手干
16	㊤佐印	78	59.035	72.0	71.95	最上川通極上品撰抜買入稀品也
17	㊤本緋	174	57.535	67.0	156.42	最上川通寺津村百姓手干寄買
18	㊤三軒家	71	55.535	63.0	61.61	最上川通三軒家村百姓手干
19	㊤紅馬	111	42.866	53.0	74.35	山形廻り商人干分
20	㊤荒熊	104	46.305	55.0	75.25	山形廻り東山蔦木村熊ノ目村百姓干合
21	㊤妙光	87	42.40	50.0	57.64	山形廻り妙見寺村百姓手干分
22	㊤佐印	321	60.359	70.0	302.74	最上川通極第一之上場撰買入分
23	㊤大嶋	133	57.359	65.0	119.20	最上川通嶋村と申上場百姓手干撰品也
24	㊤宝稀	121	50.12	60.0	94.76	宝沢村松ノ月と申上場百姓手干
25	㊤宝雨	64	47.448	60.0	47.45	中宝沢村百姓手干
26	㊤金時	128	50.834	60.0	101.67	上ノ山在長野村小倉村百姓手干寄拔上品合
27	㊤灰光	193	57.50	65.0	173.40	最上川通灰塚村百姓寄買入上品分撰合
28	㊤并灰光	83	56.75	63.0	73.60	前書同断買入分 弁天屋手干分
29	㊤国司	75	55.22	60.0	64.71	最上川通寺津落合村灰塚村より買合
30	㊤小町姫	139	49.76	65.0	108.07	中通七浦村三條目村百姓手干合
31	㊤飛光	70	49.495	60.5	54.14	山形廻り落合長九郎手干 中通百姓手干合
32	㊤仙岩	19	60.456	75.0	17.95	米沢小岩沢百姓手干寄拔キ
33	㊤正灰光	132	56.86	66.0	117.27	最上川通灰塚村極撰百姓手干合
34	㊤正金時	137	49.806	57.0	106.62	上山在百姓干買拔上品撰分 金時同様
35	㊤飛頭	99	51.86	60.5	80.22	中通達磨長崎百姓手干分
36	㊤盛光	87	49.54	60.0	67.34	山形ろ三り余先キ山八森村百姓干
37	㊤勘紅	115	46.773	53.0	84.05	山形廻り落合村勘七手干 同村又治郎合
38	㊤黒雲	75	39.295	55.0	46.05	諸方集取品合 下花
39	㊤仙大谷	43	55.278	67.0	37.14	南仙上品買入分
40	㊤西光	27	44.817	54.0	18.91	山形ろ西ノ山七ツ松村
41	㊤寺新	104	49.995	60.0	81.24	最上川通寺津落合村松兵衛手干
42	㊤松露	74	51.776	61.0	59.87	下郷羽入村百姓干 寺津落合商人干合
43	㊤大関	68	52.469	62.0	55.75	最上川通中目村二位田村合
44	㊤柳光	69	48.983	59.0	52.81	山形廻り青柳百姓手干
45	㊤龜山	72	50.00	59.0	56.25	山形廻り風間村百姓干 但袋二而買入候処目方輕キ
46	㊤竹光	49	50.00	59.0	38.28	山形廻り風間村百姓干 但袋二而買入候処目輕有之
47	㊤舞鶴	71	50.50	58.0	56.02	山形廻り風間村百姓寄買 上品
48	㊤松風	72	49.00	57.0	55.13	山形廻り風間まんちうや手干
49	㊤紅梅	156	45.839	55.0	111.73	山形ろ三り先キ東山休石村百姓干
50	㊤灰長	98	53.824	61.0	82.42	最上川通灰塚村長左衛門手干
51	㊤音姫	218	61.242	70.0	208.61	最上川通極々第一之場寄撰抜キ極稀之上品也
52	㊤浦嶋	68	58.045	66.0	61.67	最上川通向長崎まれ極上品拔買入合也
53	㊤天下一	74	59.544	71.0	68.85	最上第一之高山田代村と申処百姓干寄撰抜買入
54	㊤市娘	76	51.234	61.5	60.84	中通商人手干揃品也
55	㊤極旭	168	49.156	59.0	129.03	山形廻り落合村百姓干合
56	㊤大頭	73	54.091	62.0	61.70	最上川通長崎村百姓手干
57	㊤劔山	64	50.805	60.0	50.81	山ノ辺百姓大寺村百姓手干分合
	袋ノ	6007				

【表 3 - 2】

番号	荷印・銘柄	荷 数	一駄あたり 京着値	一駄あたり 値 打	原 価	備 考 (仕入地 など)
		袋	両	両	両	
②	大町村 六右衛門殿造分					
58	㊤大光	78	56.863	68.0	69.30	下郷大町村百姓手干
59	㊤大緋	84	56.19	67.0	73.75	下郷大町村百姓手干
60	㊤清水	105	50.464	63.0	82.79	下郷大町村大清水村百姓手干合
61	㊤大司	86	49.617	62.0	66.67	下郷今町成生大清水百姓手干
62	㊤大寶	42	50.462	56.5	33.12	下郷成生大清水百姓手干合
63	㊤古今	64	55.665	62.0	55.67	下郷谷地在田井村百姓手干
64	㊤清瀧	105	55.553	63.0	91.14	下郷大清水寄拔キ極稀品
	袋数	564				
③	天神湯沢 川嶋屋権吉殿					
65	㊤名山	38	50.809	64.0	30.17	下郷天神湯沢村川嶋権吉殿勝手干
	袋数	38				
④	天童 高木屋七兵衛殿造り分					
66	㊤関ノ戸	158	50.096	59.0	123.67	下郷小関村百姓手干
67	㊤山姥	40	51.225	56.0	32.02	下郷小関高木村百姓干
68	㊤鏡岩	83	52.04	61.0	67.49	天童老ノ森百姓寄拔買入分
69	㊤猪王山	176	53.00	61.0	145.75	下郷高木村百姓手干 極吟味寄拔買入
70	㊤最一	74	52.171	59.0	60.32	天童廻り百姓手干 上品
	袋数	531				
⑤	楯岡 青沼惣治殿造り分					
71	㊤金山	68	49.666	58.0	52.77	下郷楯岡廻り百姓寄買
72	㊤長稀	72	57.329	68.0	64.50	下郷長どろ村百姓衆手干 極撰上品之分
73	㊤清姫	41	57.359	72.0	36.75	下郷極第一之場百姓撰買入上品也
	袋数	181				
⑥	江俣村 鈴木屋長四郎殿造分					
74	㊤玉川	146	56.04	63.0	127.84	最上川通百姓千分 寄拔買入分
	袋数	146				下店調分品也 綿勇殿へ差向置
⑦	江俣村 鈴木屋長四郎殿組合分					
75	㊤音羽	76	56.0位	64.0	66.50	
76	㊤清水	32	50.0位	60.0	25.00	
77	㊤吉田	105	53.00	61.0	86.95	
78	㊤力七	85	50.00	58.0	66.41	
	組合分	298				
⑧	寒河江造り 天童造り分 ㊤五分 ㊤五分 組合					
79	㊤寒紅	139	52.678	65.0	114.38	寒河江八幡屋手干分
80	㊤高谷	103	53.03	67.0	85.35	最上川通高谷村百姓手干
81	㊤国一	69	47.174	59.0	50.86	天童廻り百姓手干
82	㊤国一印ノ内へさし	11	44.917	56.0	7.72	
	袋数	322		諸経費込計	267.99	

典拠) 嘉永3年9月「為登紅芋糸元揚り取調帳」(宮城県柴田郡村田町大沼正治郎家文書)。

補注) \*1 小数点以下は10進法である。京着値を除き、原則として四捨五入により小数第2位までを表示した。帳面にある永貫匁および銀貫匁の記載は金に換算した。

\*2 原価＝袋数÷64×京着値。

\*3 番号79～82の紅花荷については一駄あたり京着値記載がなく、寒河江や天童の干花生産者から集荷した時点での原価(一駄あたり素上り)が記載されており、京着値欄に斜体字で表示した。同様に、原価欄の斜体字の数字は、一駄あたり素上り×各荷物袋数÷64袋(1駄)で計算した数値である(帳面記載の数値である)。82番の原価欄の斜体字数字の下にある諸経費込計とは、番号79～82の原価欄の斜体字数字の合計に長谷川家(大沼家との組合)が買入れ後に支出した諸経費(役金・荷造入用・運賃・取引立会手当・札金酒手・口銭など)を足した合計(すなわち、これらの荷が京都に着くまでに要した原価の総計)である。

\*4 番号①～⑧の集出荷形態は帳面の記載順に表示した。商人名などの表記法も帳面のままとした。

また、表1より京着値と値打の双方が判明する①～⑤の最上紅花に関して、(値打—京着値)÷京着値の計算式により、⑥長谷川家が販売以前に企図した各紅花荷の利益率を単純に合計し平均すると一八・六二％となり利益率の目標を高く設定していたことがわかる。一方、表2のデータから①～⑤の紅花荷の販売結果を合計しその平均利益率を算出すれば八・五九％となる。値打の設定により同家が当初設定した利益率の目標値と販売結果における実際の利益率とでは一〇％余異なる結果となった。市場の現実とともに、同家が高めに値打を設定し高水準の利益率を追求する積極的な販売戦略をとっていたことが判明する。従来、京着値・値打・仕切値段の三値の関係をふまえた個別商人の紅花販売実態の分析はなされてこなかっただけに、表1は紅花商人による売り付け交渉の意図と現実を大量のデータよりあきらかにする貴重な資料となると思われる。さらに、⑥長谷川家が販売以前に企図した各紅花荷の利益率目標値を検討すると、最高が16番の⑦寺新で二六・二六％、最低が36番の⑧灰龍で九・三％である。その率は各荷毎に異なり大きな幅があり、値打が各荷の一駄あたり京着値に一律の利益率目標値をかけて決定されたのではないことが明確である。⑥長谷川家が荷毎に附花を用いて品質を査定し、市場における利益性を各荷毎に検討し値打をし売り付け交渉に臨んだことが指摘できる。

### 三 嘉永三～五年の紅花取引の実態

表3・表4は、Ⅱ嘉永三庚戌年九月吉日「為登紅苧糸元揚り取調帳」をもとに作成したものである。また、表6・表7は、Ⅲ嘉永五年九月吉日「子夏為登紅花青苧絹糸調」をもとに作成したものである。

Ⅱ・Ⅲの帳面はともにⅠの帳面と記載様式は類似しているが、Ⅲの帳面には値打の記載がなく、またⅡ・Ⅲの帳面には各紅花荷毎に仕入地

(および干花生産者)や品質に関する情報が書き込まれている点などがⅠの帳面と異なる。また、嘉永三～五年の紅花荷に関しては各荷毎の売却結果を記した上京支配人の「紅花売日荷得簿」などの帳面が現段階では確認できないため、多くの紅花荷について仕切値段などが不明であり、全体的な紅花売買と利益の実態を検証することができない。また、Ⅰの帳面では先述したように二つの書上が括り付けられていたため遅れて集出荷した紅花の荷量などが判明したが、Ⅱ・Ⅲの帳面にはそうした書上類が括り付けられてはいない(ただし、嘉永三年についてはⅡの帳面とは別に、同年に出荷した奥州紅花の一部に関する仕切調書上が存在しているの(後)にふれる)。表3・表4および表6・表7は、このような特徴をもつ帳面の性格をふまえて作成したものである。そのため、これらの表で対象にした紅花は夏為登Ⅱ通常出荷期に出荷したものが中核であると考えられ、奥州紅花を中心に遅れて集出荷した紅花荷は一部を除き把握できていないと考えられる。このようにⅡ・Ⅲの帳面の史料的制約と特徴を把握したうえで、以下分析をおこなう。

まず、表4やその他の史料をもとに嘉永三年の集出荷の実態について考察したい。Ⅱの帳面には最上紅花のみが記載されており、表4の合計は八〇八七袋(一二六駄二三袋)におよぶ。いずれも夏為登の最上紅花である。表2の①～⑤・⑩が嘉永二年夏為登の最上紅花に相当するが、その合計六五一六袋を上回る荷数である。夏為登の最上紅花の約四分の三を内造りが占めている点は前年と同様であり、羽州村山郡における集出荷の主な基盤が⑥長谷川店独自のネットワークに置かれていることがここでも検証できる。②の大町村六右衛門、③の天神湯ノ沢川嶋屋権吉、④の天童七高木屋七兵衛、⑤の楯岡青沼惣治、⑥の江俣村長鈴木屋長四郎は、前年と比較すると各荷数に増減が見られるが、いずれも連年にわたって⑥長谷川家の最上紅花の仲買・荷造りを担当していることがわかる。そのうち長鈴木屋は、やはり前年に引き続き組合(⑦)に参加して

表4 嘉永3年(1850)長谷川吉郎治家の紅花取引の実態(最上紅花分)

産地・集出荷形態	荷数	原価
	袋 (%)	両
①内造り分	6007 (74.28)	4919.71
②大町村 六右衛門殿造分	564 ( 6.97)	472.44
③天神湯沢 川嶋屋権吉殿	38 ( 0.47)	30.17
④天童 高木屋七兵衛殿造り分	531 ( 6.57)	429.25
⑤楯岡 青沼惣治殿造り分	181 ( 2.24)	154.02
⑥江俣村 鈴木屋長四郎殿造分	146 ( 1.81)	127.84
⑦江俣村 鈴木屋長四郎殿組合分	298 ( 3.68)	244.86
⑧寒河江造り 天童造り分		
⑨五分 至五分 組合	322 ( 3.98)	267.99
合 計	8087 (100.00) (126駄23袋)	6646.28

典拠) 嘉永3年9月「為登紅芋糸元揚り取調帳」(宮城県柴田郡村田町大沼正治郎家文書)。

補注) 表3に表示した各紅花荷のデータをもとに作成した。

いる。⑧は上京支配人である正(生印も使用)大沼正治郎と⑨長谷川家の均等出資による組合紅花である。この寒河江花・天童花に関する集出荷の諸実務については、Ⅱの帳面にある口銭・手当・酒手などの記載から、現地の皿沼(嶋村枝郷)宇八・天童七高木屋が仲買・荷造り、米蔵・庄右衛門が取引立会い、鍵屋が取次をおこない、十右衛門・三八がその他実務に関与したことが判明する。表3の番号79・82がこの組合紅花に該当するが、その荷印⑩は⑨長谷川家と企正両大沼家の組合紅花などに用いられる荷印であり、両家の屋印を合成したものである。この組合紅花の集出荷は⑩両家の共同出資により現地の宇八・高木屋以下に実務を担わせて実現したことがわかる。

嘉永三年において⑨長谷川家が夏為登の最上紅花以外にどれだけの紅花を出荷したかは先述のように不明であるが、正大沼家文書にはその一部の動向を知らせる史料がある。翌四年一〇月に⑨長谷川店が大沼屋正次郎に宛てた書上で、内容はA「嘉永三戌夏為登奥仙紅花売仕切調水沢造り」、B「嘉永三戌年為登山田屋新五郎殿造分売仕切調」、C「戌夏為登最上紅花組合分売仕切調」からなる。

Aは⑨二分五厘・⑩二分五厘・企二分五厘・正二分五厘の四家が均等出資した組合形態による出荷紅花の仕切調書上であり、荷印に⑩印・⑨印・⑨印が付された合計一〇三〇袋の奥仙紅花が書き上げられている。この紅花荷の原価(買代金諸掛り添金等)合計は金七四五両三分・銀五匁七分四厘、売代金合計から原価合計を差し引いた純益(利徳金)合計は金九八両二分二朱・銀一七匁七分九厘と記されており、これらの数値をもとに利益率を試算すると一三・二六%となる。この利得金を均等に四ツ割して長谷川吉郎治・長谷川吉内・大沼正七・大沼正治郎の各家が取得している。この奥州水沢造りの組合紅花の集荷に関してはさらに別史料を正大沼家文書のなかに確認できた。嘉永三年八月に水沢穀田屋七平が村田大沼正七・正治郎に宛てた「戌年紅花入記」である。これによ

表5 嘉永4年(1851)長谷川家・大沼家組合紅花取引の実態(夏為登分)

仲 買 人		荷 印・荷 数	原価合計	備 考
地 名	名 前			
天 童 南 部 水 沢 一ノ関	高木屋七兵衛造	㊤印紅花 348	314.25	組合仲真 ㊤5分・㊤5分
	吉田屋庄四郎殿造	㊤印紅花 395	320.625	" ㊤5分・企3分・㊤2分
	穀田屋七平殿造	㊤印紅花 746	600.625	" "
	金森屋新之助殿	㊤印紅花 378	315.00	" "
合 計		1867	1550.50	

典拠) 嘉永4年10月「㊤組合紅花買揚并奥仙南部紅花荷数調帳」(宮城県柴田郡村田町大沼正治郎家文書)。

補注) 金額は両以下は10進法で表示した。端銀は切り捨てた。

れば、穀田屋はAの大部分に相当する九八袋の紅花荷を才治ら七名の小商人・生産者から仲買し、その買代金に役金・仲金口銭・荷造り入用を加算した原価合計金七〇九兩二分・銀三匁五分余を両大沼家に請求し、両大沼家から八月中に皆済されたことが検証できる。したがって、この水沢花の集出荷は㊤㊤企正の共同出資により企正のイニシアチブで水沢穀田屋を仲買として動員し、穀田屋―現地小商人・生産者のネットワークを基盤に実現したことが指摘できる。組合形態による集出荷の構造が判明する事例である。

Bは奥州村田の口山田屋新五郎(山新)が仲買・荷造りの実務をおこない、㊤二分・企二分・正一分・口五分の出資率で集出荷した組合紅花の仕切調書上である。南仙紅花で合計一二六〇袋あり、いずれも荷印は㊤印が付けられている。この紅花荷の原価(元代金諸掛り添金等)合計は金一一〇七兩三分・銀七匁

三分、売代金合計から原価合計を差し引いた純益(利得金)合計は金一六一兩・銀八匁八分と記されており、これらの数値をもとに利益率を試算すると一四・五五%となる。この利得金を先の出資率にもとづき長谷川吉郎治・大沼正七・大沼正治郎・山田屋新五郎の四家に分配している。A・Bの仕切調書上の荷数を合計すると二二九〇袋となる。なお、IIの帳面の末尾には「直打左二調」として南仙分五一銘柄、奥仙分一九銘柄の名称と各値打が書き上げられている。各荷数などは不明であるが、値打が最低五九兩・最高七五兩の幅で記録されている。この合計七〇銘柄のうち約三分の一の南仙分一三銘柄、奥仙分一〇銘柄がA・Bの仕切調書上に出てくる全銘柄と合致する。これらから、嘉永三年に㊤長谷川家が出荷した奥州紅花の荷数はA・Bの仕切調書上にある荷数二二九〇袋を大きく上回る量であったことが推察される。

なお、Cの仕切調書上は先述した㊤正両家の共同出資による寒河江・天童集荷の組合紅花(表3の㊤)の仕切調である。これによれば、原価(元代金掛物問屋世話料等)合計金二六八兩・銀一二匁七分、売代金から原価合計を差し引いた純益(利得金)合計は金四〇兩三分・銀一匁六厘と記載されており、利益率を試算すると一五・二〇%となる。この利得金を㊤両家で二ツ割していることが判明する。

ここまでの考察により、嘉永三年の㊤長谷川家の出荷紅花の利益率の実態については、部分的なデータではあるがA・B・Cの仕切調書上より、奥仙紅花・南仙紅花は一三〜一四%台、最上紅花は一五%台という利益率を達成しており、前年の嘉永二年と比較して高水準となっていたことが判明する。

長谷川家・大沼家の両家は組合形態による集出荷を活発に展開した。嘉永四年の㊤長谷川家の紅花取引の全貌をあきらかにする史料は確認できていないが、「正大沼家文書のなかに嘉永四辛亥年夏為登分十月吉日改」㊤組合紅花買揚并奥仙南部紅花荷数調帳 ㊤(裏表紙は記載無し)があ



り、同年における両家組合紅花の動向が知られる。その概要を表5に示した。㊤・企・正(生)の三家が表5の備考欄に示した各割合で共同出資し、天童七高木屋七兵衛・南部黒沢尻吉田屋庄四郎・水沢穀田屋七平・一ノ関金森屋新之助に仲買・荷造りの実務を依頼し、合計一八六七袋(うち最上紅花三四八袋、南部紅花三九五袋、奥仙紅花一二四袋)の集

出荷を実現したことが判明する。さらに、この組合紅花(表5)に関する仕切調書上(嘉永五年九月㊤長谷川吉郎治作成、大沼正治郎宛。表題無し)が正[大沼家文書にあるので分析したい。そこで記載されている売代金合計・原価合計・利得金から利益率を算出すると、最上紅花の㊤印三四八袋は八・八四%、奥仙・南仙紅花の㊤印合計一五一九袋は二五・五九%となり、嘉永四年における奥州紅花の利益率の高さが注目される。その利得金は表5の各出資率により各家に分配された。㊤長谷川吉郎治と企大沼正七・正(生)大沼正治郎が奥仙・南仙紅花はもちろん、最上紅花の集出荷でも組合形態で活発に共同していたことは表5のほか、表1の㊤・表4の㊤・表7の㊤・表9の㊤からも確認でき、嘉永・安政期に常態化していたことが指摘できる。

つぎに、表7をもとに嘉永五年の集出荷の実態について考察したい。

この表の典拠史料であるⅢ嘉永五年九月吉日「子夏為登紅花青苧絹糸調」の表題からあきらかなように、表7の対象紅花は基本的に同年の夏為登紅花に限られる(跡買南部紅花(表7の㊤)もⅢの帳面には記されており一部の跡買荷も含まれるが、この部分はあきらかに筆跡・書式が㊤までとは異なり後に追記されたと思われる)。Ⅲの帳面は、最上紅花に限定していたⅡの帳面とは異なり、他産地の紅花も記載しており、夏為登Ⅱ通常出荷期に㊤長谷川家が集出荷した紅花産地の分布が把握できる。合計七八四九袋(一二二駄四一袋)という荷数は、嘉永二年の夏為登分(表2の①⑤)が一一三〇〇袋を上回っていたことと比較すると少ない。夏為登の最上紅花に限定して比較しても、嘉永二年(表2の①⑥・⑤)

六五一六袋、嘉永三年(表4)八〇八七袋であるのに対して、嘉永五年(表7の①⑦)は四三三四袋にとどまり、㊤長谷川家は嘉永五年夏為登の紅花出荷量を全体として縮小させていたと考えられる。

最上紅花のうち内造り分(①②)が約三分の二を占め比重が高い点は従来と同様である。一方、②の岡崎米蔵、③の村田[大沼正治郎、⑤の食徳次、⑦の江俣村長鈴木屋長四郎などの、いずれも均等出資の組合形態による集出荷量の比率が例年よりも高まり、かつ新規の共同出資者(②⑤)と小規模な組合出荷であるが提携している点が注目される。②の場合は、集出荷の実務は長谷川店が担当しているので買付資金の共同出資が目的の組合であることが判明する。㊤長谷川家が共同出資者を固定化せずに出荷組合を形成し、集荷ネットワークの開拓や買付資金の補強を志向していたことがうかがわれる。④は大町村六右衛門、⑥は楯岡青沼惣次、⑦は長鈴木屋が連年通り仲買・荷造りをおこなった。

他産地紅花の集出荷の動向で注目されるのは、江戸紅花市場に進出し⑨江戸新和泉町の出羽屋喜兵衛を仲買とした集出荷(また表6の54・55から一部は京都為登置荷を買い入れていることも判明する)を実施した点や、⑧の下総古河宿の八百屋儀左衛門を仲買として総州紅花などの買い付けを実現したことである。㊤長谷川家が産地や集荷商人を固定化せず、年により変化させていたことが判明する。⑩の奥仙紅花買入分については水沢の穀田屋七平・南部黒沢尻の吉田屋庄四郎らが仲買・荷造りを担当したことが判明する(表6備考欄参照。東山や岩井堂などから集荷)。奥州紅花に関しては、遅れて集出荷した紅花の多くがⅢの帳面からは洩れていると考えられる。

Ⅱ・Ⅲの帳面の注目点は、最上紅花分に関して各紅花荷毎に仕入地(および干花生産者や品質に関する情報)が朱書きしてある点にある。幕末期山形城下町商人のトップクラスによる最上紅花買い付けの実態を、同一年度に大量に、かつ地域空間的にあきらかにする貴重なデータであ

表6 嘉永5年(1852)長谷川吉郎治家の紅花荷一覧

【表6-1】

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値	原価	備考(仕入地など)
① 内造り					
		袋	両	両	
1	㊤灰光	261	63.62	259.45	例年灰光村最上川通すじ
2	㊤谷風	114	48.91	87.12	山形廻り風間村百姓口合
3	㊤大極	185	57.02	164.82	東山田中三宝賀百姓寄買口合
4	㊤本緋	189	64.43	190.27	最上川通寺津百姓上物口合
5	㊤佐印	102	65.50	104.39	最上川通諸方集寄買 上品口合
6	㊤灰光	155	64.75	156.82	最上川通寺津新田百姓寄買
7	㊤金冠	74	64.53	74.61	最上川通元橋村百姓寄買口合
8	㊤大頭	68	52.80	56.10	最上川通取集口合
9	㊤宝雨	97	58.32	88.39	下中宝沢百姓千口合 但し宝紅押込上り
10	㊤宝紅	70	58.32	63.79	下中宝沢村百姓千口合
11	㊤旭山	102	60.23	95.99	東山蔭木村高野百姓千 寄買口合
12	㊤花王	65	66.26	67.30	山寺馬形百姓千 寄買極上撰 外高山寄買入
13	㊤天下一	83	69.12	89.64	上宝沢新山百姓千寄買入分口合 但し宝稀押込上り
14	㊤宝稀	93	69.12	100.44	上宝沢寄買百姓千 但し天下一押込上り
15	㊤名月	69	55.22	59.53	中通最上川すじ文右衛門新田
16	㊤金時	145	65.82	149.12	上山在長野百姓千寄買
17	㊤金時	76	65.82	78.16	上山在寄買入分口合
18	㊤極旭	158	50.49	124.65	山形廻り落合村百姓千 寄買口合
19	㊤鬼腕	80	68.76	85.95	上山在百姓寄抜キ買口合
20	㊤鬼頭	76	68.76	81.65	上山在百姓寄抜キ撰買入口合
21	㊤大関	45	63.31	44.51	中通百姓手千 上品口合
22	㊤剣山	50	51.72	40.41	山形在落合村口合
23	㊤佐印	197	69.38	213.56	例年佐印村百姓寄買 最上川通すじ
24	㊤佐印	81	69.38	87.81	例年佐印村寄買 最上川すじ
25	㊤仙旭	18	60.48	17.01	奥仙5商人持参候分 当所二而買入
	袋ノ	2653			
② 内造り ㊤五分 岡崎米蔵殿五分 組合仲真					
26	㊤極雨	75	45.31	53.10	山形町 五日町すわ町口合
27	㊤沢紅	77	51.33	61.76	山形町商人千 外二地廻り百姓も少し入
	袋ノ	152			
③ 村田 大沼屋庄治郎殿組合口 ㊤五分 至五分 仲真					
28	㊤出精	213	51.16	170.25	山形 青田小立桜田百姓寄抜買入口合
29	㊤極光	92	53.86	77.42	山形在落合村
30	㊤市娘	65	55.00	55.86	山形在落合村市左衛門手千
	袋ノ	370		浦経費込計 314.10	
④ 大町村 六右衛門殿造					
31	㊤清水	76	67.63	80.31	例年清水印村下郷
32	㊤音姫	75	68.28	80.02	下郷頭物口合
33	㊤浦嶋	81	68.28	86.42	下郷 大町村百姓千口合
	袋ノ	232			
⑤ ㊤五分 食徳次五分 組合					
34	㊤天下一	22	70.23	24.14	最上第一 松沢百姓手千
35	㊤金冠	33	67.73	34.92	最上第一 嶋村大堀村百姓千
36	㊤金星蟹紅	19	67.73	20.11	最上下郷第一 蟹沢村
	袋ノ	74			
⑥ 楯岡 青沼惣次殿造り					
37	㊤金王山	139	67.20	145.95	下郷 楯岡近在百姓千
38	㊤長稀	72	67.20	75.60	下郷 長トロ百姓手千口合
39	㊤松沢	36	70.30	39.54	最上第一 松沢村百姓寄抜キ口合
40	㊤一力	80	67.20	84.00	最上下郷楯岡在百姓寄買口合
41	㊤荒熊	77	67.20	80.85	楯岡在百姓寄買入口合
42	㊤清姫	87	67.20	91.35	楯岡在百姓寄抜キ口合
43	㊤小柳	126	67.20	132.30	楯岡在百姓寄買口合
	袋ノ	617			

【表6-2】

番号	荷印・銘柄	荷 数	一駄あたり 京着値	原 価	備 考 (仕 入 地 など)
袋 両 両					
⑦	江俣村 鈴木長四郎殿造 ⑤五分 ⑥五分 組合				
44	⑥志賀	69	53.22	57.38	江俣村百姓寄拔キ 上頭物分
45	⑥岩倉	75	53.22	62.37	江俣村商人手干し
46	⑥石山	74	53.21	61.52	江俣村商人手干し
47	⑥宇治	18	53.21	14.97	下郷最上川すじ寄買抜 頭物
	袋	236			
⑧	古河宿 八百屋儀左衛門殿買口				
48	⑥玉雨	136	75.00	159.38	最上屋 (最上屋喜八) 行
49	⑥玉磨	77	68.00	81.81	最上屋行
50	⑥水脈	67	67.00	70.14	最上屋行
51	⑥水頭	84	68.00	89.25	最上屋行
52	⑥水光	91	71.50	101.66	最上屋行
53	⑥飛錦	74	68.00	78.63	最上屋行
	袋	529			
⑨	江戸 出羽屋喜兵衛殿買口				
54	⑥海老	73	四印込 82.50	94.10	美濃屋忠右衛門殿行 尤京都為登置分買入候
55	⑥大里	73	" 82.50	90.23	伊勢屋理右衛門殿行 尤京都為登置分買入候
56	⑥大井	74	" 82.50	95.39	古長 (古手屋長右衛門) 殿行
57	⑥愛染	71	" 82.50	91.52	古長殿行 但し極上品也 大略八十九両 但し見当
58	⑥金谷	92	78.00	112.13	綿勇 (綿屋勇蔵) 殿行
59	⑥金時司	69	二口込 85.50	92.18	古長殿行 此品ハ随分頭物上々品
60	⑥金紅	71	85.50	94.85	古長殿行 此分も頭物極上
61	⑥金司	80	80.00	100.00	古長殿行 此分直段別段利好物 極々上品也
62	⑥金王	76	80.00	95.00	古長殿行 此分極々品宜敷頭物 直段ハ格別利好物也
	袋	776			
⑩	酒田 鐘屋惣右衛門殿 庄内紅花買入				
63	⑥黄金	121	55.0位	103.98	仕切参不申 是非其内取急キ売払第一之品也
64	⑥金時	6	—	—	右同断
	袋数	127			
⑪	奥仙紅花買入分				
65	⑥仙輝	173	—	—	東山買口分
66	⑥仙鑑	147	—	—	東山買口分
67	⑥仙金光	110	—	—	東山買口分
68	⑥仙金登	126	—	—	東山買口分
69	⑥仙飛	87	—	—	⑥訳口老番
70	⑥仙頭	87	—	—	⑥訳口式番
71	⑥仙緑	88	—	—	⑥訳口三番
72	⑥仙珠	87	—	—	⑥訳口四番
73	⑥仙若戎	105	—	—	東山買上候分 ⑥訳口取合
74	⑥仙鶴	63	—	—	⑥印訳口
75	⑥仙穀	110	—	—	水沢穀七 (穀田屋七平) 殿 買上品
76	⑥旭山	128	—	—	南部 岩井堂造り
77	⑥仙錦	88	—	—	南部吉庄 (吉田屋庄四郎) 殿出し
78	⑥金猩々	88	—	—	南部吉庄殿出し
	奥仙南部	1487			
⑫	跡買南部紅花				
79	⑥老松	88	—	—	綿勇殿行
80	⑥仙松	88	—	—	団行 (伊勢屋源助)
81	⑥沢撰	88	—	—	呷行 (西村屋清九郎)
82	⑥沢稀	88	—	—	△行 (伊勢屋理右衛門)
83	⑥花司	88	—	—	
84	⑥花司花園	22	—	—	全行 (最上屋喜八)
85	⑥花園	134	—	—	⑥行 (美濃屋忠右衛門)
	合	596			

典拠) 嘉永5年9月「子夏為登紅花青芋絹糸調」(宮城県柴田郡村田町大沼正治郎家文書)。

補注) \*1 小数点以下は10進法である。四捨五入により小数第2位までを表示した。帳面にある永貫匁および銀貫匁の記載は金に換算した。

\*2 原価=袋数÷64×京着値。

\*3 番号28～30の紅花荷については一駄あたり京着値記載がなく、山形近在の商人や干花生産者から買入した時点での原価 (一駄あたり素上り) が記載されており、京着値欄に斜体字で表示した。同様に、原価欄の斜体字の数字は、一駄あたり素上り×各荷物袋数÷64袋 (1駄) で計算した数値である (帳面記載の数値である)。30番の原価欄の斜体字数字の下にある諸経費込計とは、番号28～30の原価欄の斜体字数字の合計に長谷川家 (大沼家との組合) がこれらの荷の買入れ後に支出した諸経費 (役金・荷造入用・運賃・礼金・口銭など) を足した合計 (すなわち、これらの荷が京都に着くまでに要した原価の総計) である。

\*4 上記の他に、津藤屋権六に対する荷為替紅花荷今紅頭稀印100袋 (最上紅花) を山形より出荷していることが判明する (江戸井上重次郎經由京都行き)。長谷川家が100袋を引当に95両を津藤屋に貸付けその元利金を取得するという荷為替であり、山形の竹原屋勇太郎の世話で取り組まれたとある (9～11月の利足済の記載有り)。

\*5 番号①～⑫の集出荷形態は帳面の記載順に表示した。商人名などの表記法も帳面のままとした。

る。羽州村山郡における紅花生産の地域的展開の研究にとつても重要な基礎資料となると思われるので、表3・表6の各備考欄に帳面の史料表現通りに記載した。

まず、表3から、嘉永三年の最上紅花の仕入地域を検討しよう。⑧長谷川家は、【山形地廻り】・【中通】・【最上川通】・【下郷】・【上山在】などの地域区分を使用し仕入地の記録をおこなっている。①内造り分の仕入地域は、まず【山形地廻り】の仕入地域として前田村・沖原村・印役村・十文字村・風間村・青柳村・長町村・東山村・木・妙見寺村・落合村などが記載されている。同家はこれら山形城下町の近在周辺域の村々の百姓手干や商人干になる紅花を大量に買い入れている。とくに、落合村の長九郎・勘七・又治郎・松兵衛や風間村の饅頭屋などの干花生産者の名前・屋号が記載されており、⑨長谷川家が注目していたことがわかる。また山形地廻りとはされていないが山形より東西の各丘陵地沿いに位置する宝沢村・八森村や山辺・大寺村からも仕入れている。なかでも上中下宝沢村からは各表からあきらかに連年良質な紅花を買い入れており⑩長谷川家の集荷拠点の一つであったといえる。つぎに【中通】の仕入地としては、長崎村・達磨寺村・文右衛門新田・七浦村などが記載されている。山形地廻りより少し北東域辺を中通と呼称しており、これらの各村々の百姓手干紅花や商人手干揃品を買い入れている。さらに【最上川通】の仕入地としては、長崎村・寺津村・灰塚村・本楯村・嶋村・中野目村などが記載されている（長崎村は大村であるためか中通と重複して入っている）。中通よりもさらに北の最上川沿いの村々を最上川通と呼称しており、百姓手干の紅花を大量に買い入れている。灰塚村の弁天屋や長左衛門という干花生産者の屋号・名前が特記されている。さらに北方の地域Ⅱ【下郷】の仕入地としては羽入村のみが記載されている。また、山形より南方の【上山在】の仕入地としては永野村・小倉村が記載されている<sup>14</sup>。

これら仕入地の村々は幕領をはじめ山形藩領・上山藩領・天童藩領・白河藩領・佐倉藩領・土浦藩領などの様々な領主支配のもとにあり、⑧長谷川家が領主支配の別に関わりなく村山郡の中央・南部に内造り紅花の広域的な集荷網をつくり集出荷を実現していたことが判明する。なかでも【山形地廻り】と【最上川通】からの集荷量が多く、これらの地域をその重要な基盤としていたことが検証できる。

つぎに、内造り紅花の集荷方式について考察したい。注目すべきは、表3の備考欄をみると「極々第一之場寄撰抜キ極稀之上品（番号51）」、「極上品撰抜買入稀品也」（16）、「極第一之上場撰買入分」（22）、「買拔上品撰分」（34）などの記載が多数確認できるように、⑨長谷川家が仕入れにあたって産地の生産者や商人より「極上品」「稀品」「上品」などの高品質の紅花を選び抜き買い付けているケースがよくみられることである。また、「まれ極上品撰買入合也」（52）、「上品合」（26）など、複数の生産者あるいは複数の産地の良質な紅花を合わせて一つの銘柄荷を造っていることも判明する。表3の一駄あたり京着値および一駄あたり値打をみると、上品・選抜品などと記載された紅花荷の京着値は凡そ五〇〇六〇両前後、値打は凡そ六〇〇七五両が付けられ、他の荷と比較して両値ともに高い傾向にあり、これらが産地より選抜買入された良質紅花であることを数値から裏付けする。それらの買い付け荷量も多い傾向にある。良質な紅花を算出する村として記載されたのは風間村・宝沢村・長崎村・寺津村・灰塚村・本楯村・嶋村・永野村・小倉村などであり、なかでも【最上川通】の村々から高品質の紅花を大量に買い付けるケースが多く確認できる。

つぎに、仲買および組合形態による集出荷分の仕入地や仕入方法について検討したい。表3の②大町村六右衛門殿造分の仕入地としては、【下郷】の大町村および近接する清水村・今町村・成生村、そして最上川対岸（東側）の田井村が記載されている。六右衛門は居村・近隣村々の

表7 嘉永5年(1852)長谷川吉郎治家の紅花取引の実態

産地・集出荷形態	荷 数		原 価
	袋	(%)	両
<b>最上紅花</b>			
①内造り	2653	(33.80)	2581.49
②内造り			
㊦五分 岡崎米蔵殿五分 組合仲間	152	(1.94)	114.86
③村田 大沼屋庄治郎殿組合口			
㊦五分 至五分 組合	370	(4.71)	314.10
④大町村 六右衛門殿造	232	(2.96)	246.75
⑤㊦五分 食徳次五分 組合	74	(0.94)	79.17
⑥楯岡 青沼惣次殿造り	617	(7.86)	649.59
⑦江俣村 鈴木屋長四郎殿造			
㊦五分 良五分 組合	236	(3.01)	196.24
	<b>4334</b>	<b>(55.22)</b>	<b>4182.20</b>
<b>庄内紅花</b>			
⑩酒田 鎧屋惣右衛門殿 庄内紅花買入	127	(1.62)	103.98+ $\alpha$
<b>総州紅花など</b>			
⑧古河宿 八百屋儀左衛門殿買口	529	(6.74)	580.87
<b>武州紅花など</b>			
⑨江戸 出羽屋喜兵衛殿買口	776	(9.89)	865.40
小計 (①～⑩)	<b>5766</b>	<b>(73.46)</b>	<b>5732.45+<math>\alpha</math></b>
<b>奥州紅花</b>			
⑪奥仙紅花買入分	1487	(18.95)	—
⑫跡買南部紅花	596	(7.59)	—
	<b>2083</b>	<b>(26.54)</b>	
合 計 (①～⑫)	<b>7849</b>	<b>(100.00)</b>	
	(122駄41袋)		

典拠) 嘉永5年9月「子夏為登紅花青苧絹糸調」(宮城県柴田郡村田町大沼正治郎家文書)。

補注) 表6に表示した各紅花荷のデータをもとに作成した。なお、集出荷形態毎に付けた番号①～⑫は表6のそれに対応する。⑩の集出荷形態の原価の数値にある+ $\alpha$ とは、表6で判明するように6袋分の原価が不明であり、この分が加算されるべきことを示す。

百姓手干になる紅花を仲買・荷造りし、なかには「寄拔キ極稀品」を買  
い付けたことが判明する。③天神湯ノ沢川嶋屋権吉殿（造分）の仕入地  
は、【下郷】の居村に限られ、しかも荷は権吉倅の手干紅花である。川嶋  
屋が干花生産者であることが判明する。川嶋屋権吉は前年の嘉永二年に  
は五四〇袋を集出荷している長谷川家の有力仲買の一人であるが、その  
仕入地域は居村近隣の葉山山麓地域にひろがっていたと推測される。④  
天童高木屋七兵衛殿造り分の仕入地は、【下郷】の小関村・高木村・老ノ  
森などいずれも天童廻りの近村である。「極吟味寄拔買入」などと記され  
ているように、高木屋がこれらの村々の百姓手干紅花の品質吟味をおこ  
ない良質紅花を選抜買入したケースが確認できる。⑤楯岡青沼惣治殿造  
り分の仕入地は、【下郷】の長瀬村など楯岡廻りの村々であり、「下郷極  
第一之場百姓撰買入上品也」と記載されたように、青沼家も「極撰上品  
などを選抜買入する集荷方式を多用していることがあきらかである。⑥  
⑦江俣村鈴木屋長四郎殿造り分・組合分の仕入地については【最上川通】  
と記載されているだけであるが、鈴木屋も「寄拔買入」＝選抜買入付け  
を実施している。なお、⑧の⑨組合紅花の実態については先述した通  
りであるが、寒河江八幡屋や高谷村・天童廻りの干花生産者から集荷し  
たことがあきらかである。

以上の考察から、⑩長谷川家は自己の店組織による内造り紅花の買  
付けを【山形地廻り】・【中通】・【最上川通】【上山在】の各地域を基盤に  
実施し、さらに天童・楯岡や湯ノ沢など最上川の東西両側地域の仲買商  
人を通して【下郷】の複数の産地に進出するなど、村山郡北部を除く中央・  
南部に領主支配別をこえた広域的な集出荷網を構築し紅花取引をおこ  
なっていたことがあきらかである。また、同家による最上紅花の集荷が  
山形城下町の紅花市場に依存するものではなく村山郡の各産地より直接  
おこなうものであったことも明確である。この点は、近世後期に成長・  
発展した⑩長谷川家の紅花商人としての歴史的 성격と基盤を考察する上

で重要なポイントである。

そして、同家の集荷方式の特徴として品質吟味による良質紅花の選抜  
買い付けを多用していたことが指摘できる。この方式が内造り分にとど  
まらず仲買人の集荷においても採用されていたことが確認できた。豊富  
な買付資金による大量集荷をおこなう⑩長谷川家の場合、他の中小商人  
や豪農と比較して産地買い付けをより有利に、かつ優先的に進める条件  
を得られたと考えられる。この点は、表3より極上・稀品・上品と記さ  
れた紅花荷の各荷量が少量ずつとはなっておらず、同家が良質紅花を大  
量にまとめ買入するケースが多々みられたことから指摘できる。干花生  
産者の名や屋号が特記されたケースでも一家からの集荷量としてはまと  
まった量であることが多く、同家が良質紅花を産出する干花生産者と特  
別な関係を結び購入を進めていたことがうかがわれる。後述する良質紅  
花に関する特定銘柄―特定産地の関係も同家の恒常的な選抜買入付け  
の展開が背景となつて形成されたと考えられる。

つぎに、表6から嘉永五年の仕入地や集荷方式の実態について検討し  
たい。先述のように、⑩長谷川家は嘉永五年の紅花出荷量を全体として  
縮小させたと考えられ、そのため仕入地などに関して得られるデータは  
表3と比較して少ない。全体的な傾向は嘉永三年と基本的には同じとみ  
られるが、以下注目点に限定して指摘したい。

まず、表6であらたに確認できた仕入地を指摘したい。①内造り分で  
は山寺村である。二口街道沿いの馬形集落の百姓干しになる極上品を選  
び集荷したことが判明する。②内造り組合仲間分では山形城下町である。  
城下の中心部ではなく五日町・諏訪町といった在方に近接する町々で集  
荷しており、当時これら城下周縁部の町々で紅花売買が実施されていた  
ことが判明する。「外二地廻り百姓も少し入」とあるように、山形地廻り  
の農村から城下町へ持ち込まれた百姓花の買い付けも確認される。しか  
し、先にも指摘したように⑩長谷川家の集荷基盤は山形城下町の紅花市

場にはほとんどなく、表6・表7からも山形町花の比重は数%にしかすぎないことがあきらかである。③村田大沼屋正治郎殿組合仲間分では山形城下南方郊外の青田村・小立村・桜田村である。百姓より紅花を「抜買入」したとある。⑤食徳次組合分では松沢村・嶋大堀村・蟹沢村である。いずれも「最上第二」「最上下郷第一」と記された有力産地であり百姓干花を買い付けている。これら最上川沿いの村々は紅花の栽培適地として著名であり、⑥長谷川家の集荷網が「下郷」の主産地に入り込んでいたことを示す事例である。

嘉永三年にみられた同家の集荷方式の特徴は、嘉永五年の諸事例からも検証できる。「上物」「上品」「極上撰」「頭物」「上頭物」「抜キ買」「抜キ撰買入」などの記述は、表6の各集出荷形態において確認でき、品質吟味による良質紅花の選抜買い付け方式が内造り・仲買・組合の別なく採用されていたことが判明する。とくに、⑨江戸出羽屋喜兵衛殿買口では「極上品」「頭物上々品」「頭物極上」「極々上品」などの買い付けが多く、一駄あたり京着値も八〇両前後の荷ばかりである点が注目される。⑩長谷川家の江戸紅花市場進出のねらいの一つが高品質紅花の買い付けに置かれていたことがあきらかである。また、表6の番号1・23・24の紅花荷について「例年灰光村最上川通すじ」「例年佐印村百姓寄買最上川通すじ」と記載されたように、特定銘柄の集出荷が「例年」に恒常化した事例が指摘できる。灰光・佐印の銘柄は表1・表3・表6・表8にもみられ、しかも京着値や値打が高い良質銘柄であったことが判明し裏付けがとれる。そして灰光の銘柄は最上川通灰塚村（および近隣村）の紅花荷に限られるというように特定銘柄―特定産地の関係がいくつか形成され、有力銘柄として通用する事態がみられたことが注目される。

表3・表5の典拠史料であるⅡ・Ⅲの帳面Ⅱ（紅花等元揚調帳）に各紅花荷の仕入地（および干花生産者）や品質に関する情報が記入されたのは、これらの情報を上京支配人に通報することで、上京支配人による

京都での紅花売り付け交渉を説得力のある有利なものにしようとする荷主⑩長谷川家の意向にもとづくと考えられる。一方で、これらの産地情報は荷主手元の紅花買付帳にも記録され、翌年以降の集出荷に活かされたと考えられる。同家が荷毎に異なる利益率を見込んだ値打をおこなう商品管理を進めていたことは先述したが、その基礎は表3・表6でみた集荷時の品質吟味と良質紅花の産地・生産者との取引関係の形成にあったといえる。一般に京都紅花市場で常に最下位の仕切相場を推移した最上紅花の厳しい市場的条件にあつて、表2や後掲表9から判明するように⑩長谷川家出荷の最上紅花は他産地紅花と比較しても高い利益率を達成し健闘している。その背景を、同家の品質吟味による選抜買い付け方式の採用、それにもとづく荷毎の価格管理と売り付け交渉の実施に求めることができる。⑩長谷川家の紅花取引における蓄積様式の一つをここに把握できよう。

#### 四 安政元年の紅花取引の実態

表8は、「史料二」で検討したⅣの帳面の記載をふまえて各紅花荷につき荷印銘柄・荷数・一駄あたり買代金（一部は京着値）・一駄あたり仕切値段の数値を一覧にし、さらに各集出荷形態の末尾で計算されている荷数合計・買代金合計・諸掛・原価合計・売代金合計をそれぞれ表示したものである。Ⅳの帳面はⅠ・Ⅲの帳面とは記載様式を異にすることは先述したが、表8からさらに判明するようにⅣの帳面には安政元年夏出荷（夏為登）の紅花ばかりでなく、その前後の出荷紅花、すなわち同年春為登紅花や同年九月々年末の出荷紅花および翌安政二年春為登紅花に関する諸データが記録されており、この点も大きな特色といえる。

表9は、Ⅳの帳面の特色をふまえて、安政元年春・翌二年春における⑩長谷川家の出荷紅花の諸データを産地・集出荷形態毎に集計し、さら

表8 安政元年(1854) 長谷川吉郎治家の紅花荷一覽

【表8-1】

番号	荷印・銘柄	荷 数	一駄あたり 京着値 (買代金)	一駄あたり 仕切値段	買代金計	諸 掛	原 価 計	売 代 金 計	備 考
		袋	両	両	両	両	両	両	
《安政元寅年夏 出荷》									
① 内造り紅花									
1	㊦灰光	78	53.265	62.00	222.17			244.22	羽久（羽州屋久右衛門）殿売 嶋清（嶋屋清兵衛）殿 "
	㊦灰光	94	53.265	60.00					
	㊦灰光	95	53.265	56.00					
2	㊦司紅	98	42.031	52.50	64.36			79.18	西村屋清九郎殿
3	㊦大頭	66	41.062	53.50	139.86			175.57	最喜（最上屋喜八）殿 嶋清殿 総久（総屋久三郎）殿 "
	㊦大頭	76	41.062	53.00					
	㊦大頭	76	41.062	53.50					
4	㊦大門	89	42.048	53.50	108.39			137.43	嶋清殿
	㊦大門	76	42.048	53.00					
5	㊦灰光	82	51.543	65.50	220.50			268.07	綿勇（綿屋勇藏）殿 嶋清殿 "
	㊦灰光	76	51.543	63.00					
	㊦佐印	116	51.543	62.00					
6	㊦蔦紅	73	38.144	48.00	43.50			53.93	伊勢理（伊勢屋理右衛門）殿
7	㊦朝日	114	37.192	47.00	116.23			144.79	伊勢源（伊勢屋源助）殿 西村屋清九郎殿 最喜殿 嶋清殿 "
	㊦朝日	76	37.192	48.00					
	㊦朝日	10	37.192	48.00					
8	㊦極雨	74	40.497	54.00	46.83			61.72	嶋清殿
9	㊦千年	91	36.486	47.00	51.88			65.87	"
10	㊦宝雨	90	38.696	54.00	54.42			75.09	"
11	㊦市娘	94	42.162	(50.23)	61.92			73.78	吉彦（吉文字屋彦市）殿
12	㊦大関	71	44.540	51.50	50.11			57.23	河藤（河内屋藤兵衛）殿 嶋清殿
	㊦大関	1	44.540	52.00					
13	㊦宝川	70	34.524	46.00	37.83			49.56	最喜殿
14	㊦金狸々	87	33.132	53.00	44.96			70.97	"
15	㊦浦嶋	130	52.876	63.00	193.32			226.89	"
	㊦佐印	100	52.876	63.00					
16	㊦佐印	76	55.076	63.00	216.00			249.04	嶋清殿 綿勇殿
	㊦佐印	175	55.076	65.10					
17	㊦音姫	75	51.00	65.00	174.65			207.45	綿勇殿 最喜殿 嶋清殿
	㊦音姫	73	51.00	60.00					
	㊦音姫	71	51.00	64.00					
18	㊦寒紅	67	51.238	59.50	53.64			60.44(66袋分)	伊勢源殿
19	㊦金時	98	37.568	52.50	57.52			79.18	西（西村屋）清左衛門殿
20	㊦金生	103	35.667	(46.28)	57.40			74.51	岐阜八（岐阜屋八郎兵衛）殿
21	㊦仙岩	12	36.00	60.00	18.00			26.16	"
	㊦仙朱	20	36.00	49.00					
22	㊦天下一	90	51.50	63.00	72.42			87.26	吉彦殿
23	㊦末広	72	48.00	(61.28)	54.00			68.94	嶋清殿
24	㊦日本一	85	51.50	64.00	68.40			84.15	"
25	㊦最上一	85	50.447	56.00	67.07			73.63	"
26	㊦仲司	68	42.00	52.00	44.63			54.77	河藤殿
27	㊦長司	67	36.96	48.00	38.69			49.50	綿勇殿
28	㊦養光	15	40.11	49.00	9.40			11.31	最喜殿
29	㊦金光	87	35.54	47.00	48.31			63.05	最喜殿
30	㊦源印	119	36.608	48.00	68.06			88.33	大坂 河藤殿
31	㊦名月	13	42.809	47.00	8.70			9.40	最喜殿
32	㊦佐印	3	47.072	(55.22)	2.21			2.59	"
33	㊦畑谷	32	41.00	50.00	20.50			24.63	"
34	㊦金冠	74	41.71	51.50	108.19			131.20	古長（古手屋長右衛門）殿 伊勢理殿
	㊦イ	92	41.71	(51.50)					
	合 計	3779			2643.82	115.09	2758.91	3228.59	山形→京都
《安政元寅年夏 出荷》									
② 内造り ㊦五分 米庄殿五分 組合									
35	㊦岡山	77	32.64	46.00	39.27			54.79	河藤殿
36	㊦福紅	111	37.952	46.50	70.54			85.19	伊勢理殿 河藤殿
	㊦福紅	8	37.952	46.50					
	合 計	196			109.81	5.32	115.12	139.99	山形→京都



【表8-2】

番号	荷印・銘柄	荷 数	一駄あたり 京着値 (買代金)	一駄あたり 仕切値段	買代金計	諸 掛	原 価 計	売 代 金 計	備 考
		袋	両	両	両	両	両	両	
《安政元寅年夏 出荷》									
③ 内造り 高木屋七兵衛殿造 ⑤五分 大沼庄治郎殿五分 組合									
37	㊦天下一	89	35.225	51.00	100.16			137.07	最喜殿 吉彦殿
	㊦宝松	93	35.225	47.00					
38	㊦力雨	80	45.93	55.00	57.41			66.26	綿勇殿 伊勢源殿
39	㊦本雨	76	45.33	(53.15)	53.85				
40	㊦玉川	78	43.976	(55.00)	53.60			64.69	最喜殿 嶋清殿
41	㊦高木	81	42.49	56.00	53.78				
42	㊦成生	65	37.877	50.00	38.47			50.02	最喜殿 "
43	㊦養紅	6	37.331	49.00	3.50				
44	㊦玉紅	69	40.99	53.00	44.84			57.10	嶋清殿
	㊦玉紅	1	40.99	(55.46)					
45	㊦国一	80	41.735	52.00	52.67	18.98	476.74	63.78	叩西清 (西村屋清九郎) 殿
	合 計	718			457.76			575.56	
《安政元寅年夏 出荷》									
④ 高木屋七兵衛殿造 ⑤分									
46	㊦嬉野	117	47.769	58.00	87.32			104.44	叩西清殿
47	㊦小金	144	43.187	75.35	163.30 (242袋分)				
	㊦小金	82	43.187	54.00					
48	㊦花盛	48	47.537	51.00	30.40	12.21	293.22	36.96	"
	合 計	407			281.02			324.07	
《安政元寅年夏 出荷》									
⑤ 青沼惣次殿造									
49	㊦大緋	90	48.906	59.00	134.48			155.85	最喜殿 最喜殿
	㊦長稀	86	48.906	56.00					
50	㊦大紅	104	46.704	(57.52)	75.89			93.47	伊勢理殿
51	㊦本紅	71	43.270	57.00	48.00			62.29	綿勇殿
52	㊦松沢	82	43.020	(70.84)	55.12	12.77	326.28	83.29	最喜殿
	合 計	433			313.50			394.90	桶岡→京都
《安政元寅年夏 出荷》									
⑥ 内造り 高木屋七兵衛殿造 ⑤五分 斎藤長松五分 組合									
53	㊦司印	65	41.45	52.00	91.32			113.10	最上屋 嶋清殿
	㊦司印	76	41.45	52.00					
54	㊦蜀光	100	37.384	55.00	123.25			174.29	毛綿嘉 (毛綿屋嘉兵衛) 殿 最喜殿
	㊦蜀紅	111	37.384	52.00					
55	㊦花王	76	37.464	(53.00)	101.27			144.10	羽州屋 (久右衛門) 綿勇殿
	㊦花王	97	37.464	55.00					
56	㊦平印	110	39.72	44.00	68.27			74.49	近佐 (近江屋佐助) 殿
57	㊦沖司	67	38.467	48.00	40.28			49.50	
58	㊦司一	64	40.182	48.00	40.18			47.28	最喜殿 "
59	㊦松紅	83	48.045	61.00	180.92			220.71	
	㊦金冠	49	48.045	57.00					
	㊦金冠	80	48.045	60.00				59.70	大坂 清兵衛殿 河藤殿
	㊦金冠	29	48.045	58.00					
60	㊦徳紅	86	37.57	45.00	50.40	27.25	723.13	883.17	大石田經由
	合 計	1093			695.89				
《安政元寅年夏 出荷》									
⑦ 鈴木屋長四郎殿造 ⑤五分 岡長四郎殿五分 組合									
61	㊦守山	109	42.436	52.00	(72.27)			113.40	敦賀廻り
62	㊦守山	19	42.436	48.00	(12.60)				
63	㊦松山	43	—	52.00	—	—		135.99	"
	合 計	171			—				
《安政元寅年夏 出荷》									
⑧ 鐘屋惣右衛門殿造り 庄内紅花									
64	㊦羽黒雨	40	35.328	45.00	(45.26)			56.61	綿勇殿 河藤殿
	㊦羽黒雨	42	35.328	44.50					
65	㊦金峯	91	35.328	42.50	(50.78)			60.19	最喜殿 嶋清殿
	㊦金峯	1	35.328	42.50					
66	㊦常山	31	35.328	44.50	(27.05)			31.48	綿勇殿 河藤殿
	㊦常山	18	35.328	44.00					
	合 計	2230			—	—	125.36	149.27	酒田→京都

【表 8 - 3】

番号	荷印・銘柄	荷 数	一駄あたり 京着値 (買代金)	一駄あたり 仕切値段	買代金計	諸 掛	原 価 計	売 代 金 計	備 考
		袋	両	両	両	両	両	両	
《安政元寅年夏 出荷》									
⑨ 武州桶川宿 木嶋屋浅五郎殿									
67	⑩川錦	96	69.00	70.00	103.50			103.43	最喜殿売
68	⑩増紅	146	67.00	69.00	150.75			152.92	綿勇殿売
69	⑩都鳥	41	63.50	65.00	40.68			41.02	最喜殿
	合 計	283			(294.93)	5.35	300.28	297.36	桶川→大坂
《安政元寅年夏 出荷》									
⑩ 江戸 出羽屋喜兵衛殿買口分									
70	⑩金司	72	67.50	68.00	75.94			145.87	—
	⑩金時	72	68.00	68.00	76.50				—
71	⑩四王天	72	60.00	65.00	67.50			72.03	最喜殿
	合 計	216			(219.94)	3.22	223.16	217.89	与野→江戸 (江戸廻り)
《安政元寅年夏 出荷》									
⑪ 古河宿 八百屋儀左衛門殿									
72	⑩雨司	77	59.29	62.00	71.33			73.47	最喜殿売
73	⑩紅司	69	54.28	57.00	58.52			60.53	"
74	⑩水撰	72	57.96	61.50	65.21			68.02	最上屋 (喜八) 売
75	⑩玉紅	78	65.83	66.00	80.24			79.23	最喜殿売
76	⑩水雨	67	59.00	59.00	61.77			59.93	最上屋売
77	⑩水天一	77	65.00	66.00	78.20			78.22	最喜殿売
78	⑩正宗	88	60.00	66.00	82.50			69.77	最上屋売
79	⑩川玉	76	56.00	61.00	66.50			71.36	"
	合 計	604			631.76	6.22	637.98	649.92	
《安政元寅年夏 出荷》									
⑫ 市村屋五郎兵衛殿 奥仙南部紅花分									
80	⑩仙錦	71	46.54	64.00	(51.63)			69.31	綿勇殿売
81	⑩仙光	119	46.54	—	(138.89)			167.56	最喜殿売
	⑩仙稀	72	46.54	—					"
82	⑩仙玉	79	46.54	(56.87)	(57.45)			69.30	最上屋売
83	⑩仙飛	39	46.54	64.00	(28.36)			37.99	綿勇殿
	合 計	380			268.09	8.25	276.34	344.16	大石田→京都
《安政元寅年10月 出荷》									
⑬ 市村屋五郎兵衛殿 引請 南部奥仙紅花分 江戸廻し為登									
84	⑩仙美	120	45.541	58.00	(85.39)			107.12	伊勢理殿
85	⑩仙金	124	45.541	60.00	(88.24)			114.26	最上屋売
86	⑩仙正	80	45.541	—	(56.93)			72.03	伊勢理殿売
87	⑩仙利	80	45.541	(58.00)	(56.93)			73.20	最上屋売
88	⑩仙龍	86	45.541	—	≒168.56			125.86	難事入候分
89	⑩仙王	80	45.541	—					"
90	⑩仙福	20	25.00	—	—			—	"
91	⑩仙雨	211	45.541	59.00	(150.14)			186.75	西清左衛門殿売
	合 計	801			479.73	84.53	564.18	679.17	難舟花共 仙雨印違之内1袋不足 山川喜右衛門殿・土沢多吉殿へ買代金払い 江戸→京都 (江戸廻り)
《安政元寅年12月 出荷》									
⑭ 市村屋五郎兵衛殿 引請									
92	⑩仙友	147	41.00	57.00	94.17			128.96	水沢取引 総久殿
93	⑩仙市	175	33.00	—	90.23			140.07	黒沢尻取引 伊勢源殿
	合 計	322			(184.40)	—	—	269.24	黒沢尻・水沢→福嶋→大坂
《安政元寅年夏 出荷》									
⑮ 大沼正七殿造 南仙紅花分									
94	⑩仙金	97	54.23	75.00	82.09			99.61	伊勢源殿売
95	⑩仙イ	115	52.10	74.00	94.61			126.57	綿勇殿売
96	⑩仙大	83	53.80	(70.38)	69.81			89.91	岐阜八殿
97	⑩金冠	89	52.92	74.00	73.54			99.00	伊勢理殿
98	⑩仙船	89	53.30	74.00	74.12			99.05	綿勇殿
99	⑩仙倉	119	50.91	70.00	94.56			125.60	最喜殿売

【表8-4】

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値 (買代金)	一駄あたり 仕切値段	買代金計	諸掛	原価計	売代金計	備考
		袋	両	両	両	両	両	両	
100	⑤仙飾	121	52.89	68.00	99.998			126.72	最喜殿売
101	⑤仙随一	87	52.38	(70.38)	71.21			95.74	伊勢理殿売
102	⑤仙村	86	54.44	74.00	73.11			96.94	綿勇殿
103	⑤仙無類	82	54.48	80.00	69.81			99.58	西清九郎殿売
104	⑤仙一	120	55.552	75.00	104.17			135.15	綿勇殿売
105	⑤仙旭	129	55.00	(70.94)	110.86			140.21	伊勢源殿
106	⑤仙福	156	53.44	(74.00)	130.34			175.87	最喜殿
107	⑤仙理	100	53.30	75.00	(83.37)			107.57	西村清九郎殿
108	⑤仙舛	89	53.50	72.00	152.14			194.12	西清左衛門殿売
	⑤仙田	93	53.50	67.50					岐阜殿
	⑤仙鳩	98	55.42	72.50					岐阜八殿
109	⑤仙長	80	55.60	76.00	69.60			93.58	最喜殿売
111	⑤仙本福	120*	53.385	74.00	100.10			142.05	最上屋売 *さし6袋(仙無双)押込
112	⑤仙緋	80	54.47	74.00	(68.08)			90.61	伊勢理殿
113	⑤仙高	82	52.43	64.00	67.20			80.90	最喜殿売
114	⑤仙谷風	83	54.50	73.00	67.18			91.25	"
115	⑤仙花王	107	58.168	76.00	97.24			122.49	伊勢源殿売
116	⑤仙御召	80	58.563	73.00	250.72			304.86	伊勢源殿
	⑤仙奇揃	80	58.563	72.00					最喜殿
	⑤仙機	114	58.563	72.00					"
117	⑤仙改	80	55.50	72.00	209.86			267.12	伊勢源殿
	⑤仙撰	80	55.50	72.00					最喜殿
	⑤仙錦	82	55.50	74.00					伊勢源殿
118	⑤仙名月	84	57.06	76.00	92.25			93.87	最喜殿
119	⑤仙無双	6*	52.00	—	4.875			—	*仙本福方へ入勘定罷成候
	合計	2905			2482.37	203.59	2685.95	3213.52	京着ならし59.0521
《安政元寅年夏 出荷》									
①⑥	山田屋新五郎殿 ⑤二分五厘 企二分五厘 山新殿五分 組合仲真 南仙紅花								
120	⑤仙開	80	—	70.00	—			86.06	最喜殿
121	⑤仙運	80	—	72.00	—			85.66	岐阜八殿
122	⑤仙官	80	—	(73.00)	—			87.36	綿勇殿売
123	⑤仙頂	80	—	—	—			74.49	伊勢理殿売
124	⑤仙大力	80	—	70.00	—			84.49	西清(西村屋清左衛門)殿売
125	⑤仙緋	80	—	65.00	—			82.27	最喜殿売
126	⑤仙帝	80	—	70.00	—			84.25	吉文字屋彦市殿
127	⑤仙弓	80	—	71.00	—			85.92	西清(西村屋清九郎)殿
128	⑤仙立	80	—	71.00	—			85.83	伊勢源殿
129	⑤仙泉	80	—	71.50	—			86.06	岐阜八殿売
130	⑤仙御	76	—	72.00	—			84.99	鳴清殿売
131	⑤仙生	80	—	70.00	—			84.50	鳴清殿
132	⑤仙益	80	—	70.00	—			84.28	綿勇殿売 仙官印仙益印式口手形不足引
133	⑤仙一	80	—	71.00	—			85.64	最喜殿
134	⑤仙名イ	80	—	73.00	—			88.86	西清殿
135	⑤仙改	80	—	72.00	—			98.65	最喜殿
136	⑤仙イ	80	—	69.50	—			83.65	伊勢理殿売
137	⑤仙位	76	—	70.00	—			90.09	伊勢源殿売
138	⑤仙機	80	—	70.50	—			85.25	西清殿
	合計	1512			1275.75	92.75	1368.38	1607.79	村田→大石田
《安政元寅年9月 出荷》									
①⑦	大沼正七殿 ⑤五分 企五分 組合 南仙紅花 但し江戸廻し								
139	⑤仙角	57	30.976	45.00	29.90			103.13	最喜殿売・鳴清殿
	⑤仙力	92	30.976	43.00	42.22				" "
140	⑤仙大王	84	54.00	70.00	206.72			276.58	岐阜屋殿
	⑤仙名月	84	54.00	77.00					伊勢源殿
	⑤仙朱	77	54.00	70.00					岐阜屋殿
	⑤仙達	6	51.50	70.00	52.00			64.26	"
141	⑤仙雨	64	52.00	65.00					鳴清殿
142	⑤仙達	66	51.50	66.00	57.94(72袋分)			67.04(66袋分)	最喜殿売
	合計	530			(388.78)	33.96	422.73	(511.01)	村田→江戸→京都
《安政元寅年春為登》									
①⑧	最上紅花 内造り 高木屋造り 青沼惣次殿造								
143	⑤旭山	76	29.489	34.00	73.25			82.05	綿勇殿売
	⑤旭山	83	29.489	33.00					鳴清殿
144	⑤穀長	69	26.625	27.00	28.70			28.83	"
145	⑤養老	78	32.32	30.00	(39.39)			36.01	最喜殿
146	⑤高砂	120	32.32	33.00	(60.60)			60.95	最喜殿売
147	⑤玉の井	91	32.32	34.00	(45.96)			48.50	鳴清殿売
	⑤玉の井	2	32.32	24.00	(1.01)				"
148	⑤可悦	20	32.32	30.00	(10.10)			9.26	"

【表 8-5】

番号	荷印・銘柄	荷 数	一駄あたり 京着値 (買代金)	一駄あたり 仕切値段	買代金計	諸 掛	原 価 計	売 代 金 計	備 考
		袋	両	両	両	両	両	両	
149	㊤名月	91	なうし 32.32	37.00	(45.96)			51.47	嶋清殿売
150	㊤狸々	107	・ 32.32	28.00	(54.04)			46.24	"
151	㊤銘重	66	・ 32.32	35.00	(33.33)			35.65	"
152	㊤日の出	102	・ 32.32	31.00	(51.51)			48.23	嶋清殿
153	㊤姥敷	74	・ 32.32	35.00	(37.37)			39.86	最喜殿
154	㊤本徳	102	・ 32.32	34.00	(51.51)			53.54	嶋清殿
155	㊤旭印	11	・ 32.32	40.00	(5.56)			6.79	"
	合 計	1092			(538.29)	28.08	566.33	(547.38)	(村山) → 京都
《安政元寅年春為登》									
㊤ 得可寿屋徳蔵殿 奥仙紅花									
156	㊤仙奥長	170	か着ならし 32.65	30.00	(86.73)			78.78	嶋清殿売
157	㊤仙寿	80	・ 32.65	33.00	(40.81)			35.65	嶋清殿
158	㊤仙久	80	・ 32.65	(29.00)	(40.81)			35.80	"
	合 計	330			(155.25)	8.00	163.25	150.24	仙台城下 → 大石田 → 京都
《安政元寅年春為登》									
㊤ 奥仙紅花 ㊤五分 ㊤五分									
159	㊤仙奥一	106	か着 30.887	(60.34)	(51.16)			99.92	綿屋勇蔵殿仕切分
160	㊤仙刺	88	・ 30.887	—	(42.47)			93.91	最喜殿売口
161	㊤仙岩	85	・ 30.887	—	(41.02)			—	
162	㊤仙玉	21	・ 30.887	—	(10.13)			—	
163	㊤仙村雨	176	・ 30.887	—	(84.94)			—	
164	㊤仙要	85	・ 30.887	—	(41.02)			—	
165	㊤仙国一	87	・ 30.887	—	(41.99)			—	
166	㊤仙江	105	・ 30.887	—	(50.67)			—	
167	㊤仙王	22	・ 30.887	—	(10.62)			—	
	合 計	775			361.24	12.75	374.00	—	㊤全 (綿勇・最喜) 売口
《安政元寅年春為登》									
㊤ 大沼正七殿 南仙紅花 ㊤五分 ㊤五分									
168	㊤仙大	208	34.50	44.50	107.98			142.46	最喜殿売
169	㊤仙松	99	36.50	(42.65)	54.18			65.04	"
170	㊤仙上	44	34.00	38.00	23.38			25.73	"
171	㊤仙雨	85	(34.46)	38.00	45.77			49.72	"
	合 計	437			(231.31)	27.31	258.69	282.95	
《安政 2 卯年春為登分》									
㊤ 天童 高木屋七兵衛殿造り 寅冬中買入置分									
172	㊤長撰	63	なうし 41.92	—	127.07			—	
	㊤長花	65	・ 41.92	—					
	㊤長忠	66	・ 41.92	—					
173	㊤長傳	135	42.88	—	90.50			—	
174	㊤長糸	72	41.40	—	46.57			—	
	合 計	401			(264.14)	10.87	274.87	—	
《安政 2 卯年春為登分》									
㊤ 天童 高木屋七兵衛殿造									
175	㊤玉川	103	39.40	—	63.41			—	
176	㊤花王	101	41.39	—	118.35			—	
	㊤蜀玉	82	41.39	—					
	合 計	286			(181.76)	7.69	189.44	—	
《安政 2 卯年 2 月 29 日》									
㊤ 天童 高木屋造									
177	㊤嵐山	121	43.785	—	147.95			—	
	㊤加茂川	73	43.785	—					
	㊤龍王	27	28.00	—					
	㊤松嶋	6	43.785	—					
178	㊤嵯峨	92	46.22	—	66.44			—	
	合 計	318			(214.39)	9.94	224.34	—	
《安政 2 卯年春為登》									
㊤ 内造り分									
179	㊤佐印	91	なうし 47.07	—	135.35			—	
	㊤日本一	51	・ 47.07	—					
	㊤末広	40	・ 47.07	—					
180	㊤長印	5	44.00	—	3.44			—	
181	㊤司印	68	40.44	—	42.96			—	
182	㊤宝雨	33	23.488	—	12.11			—	
183	㊤仙朱	49	34.644	—	26.53			—	

【表8-6】

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値 (買代金)	一駄あたり 仕切値段	買代金計	諸掛	原価計	売代金計	備考
		袋	両	両	両	両	両	両	
184	㊤上桶	3	40.00	—	1.88			—	
185	㊤南仙	5	40.00	—	3.13			—	
186	㊤奥仙	6	35.00	—	3.28			—	
187	㊤一光	18	35.00	—	9.84			—	鳴清殿
188	㊤仁光	26	40.00	—	16.25			—	"
189	㊤徳光	48	25.56	—	19.17			—	
190	㊤乱花	6	—	—	1.88			—	乱花金1両に付1600匁かへ
191	㊤福紅	227	30.52	—	108.20			—	
	合計	678			(384.02)	20.64	404.65	—	
《安政2卯年春為登》									
㊤寒河江 八幡屋二而造り									
192	㊤浦嶋	82	41.619	—	(53.32)			—	
193	㊤寒紅	82	41.619	—	(53.32)			—	
	合計	164			—	—	106.65	—	
《安政2卯年為登》									
㊤橋岡 青沼惣次殿 買口分									
194	㊤本紅	34	41.92	—	21.17			—	
	合計	34			21.17	1.11	22.27	—	
《安政2卯年正月出荷》									
㊤奥仙紅花 大沼孫次郎殿出張二而買調 ㊤三分三厘 全三分三厘 ㊤吉内三分三厘 ㊤組合分 奥仙米屋喜十郎殿造り (903袋) 仙台城下得可寿屋徳蔵殿造り (560袋)									
195	㊤仙吉	95	48.268	—	(71.65)			—	
196	㊤仙弘	119	48.268	—	(89.75)			—	
197	㊤大頭	148	48.268	—	(111.62)			—	
198	㊤仙東関	133	48.268	—	(100.31)			—	
199	㊤仙丹頂	81	48.268	—	(61.09)			—	
200	㊤仙宝根	148	48.268	—	(111.62)			—	
201	㊤仙奥立	43	48.268	—	(32.43)			—	
202	㊤仙光照	66	48.268	—	(49.78)			—	
203	㊤仙賀	70	48.268	—	(52.79)			—	米喜殿造り903袋
204	㊤仙小町	117	36.136	—	(66.06)			—	
205	㊤仙金	65	36.13	—	(36.69)			—	
206	㊤仙花	64	36.13	—	(36.13)			—	
207	㊤仙山	163	36.13	—	(92.02)			—	
208	㊤仙新	77	36.13	—	(43.47)			—	
209	㊤仙定	74	36.14	—	(41.79)			—	得徳殿造り560袋 仙台城下→京都
	合計	1463			—	—	1037.69	—	

典拠) 安政2年2月「寅夏5卯春迄為登紅花青芋絹糸元揚り調」(宮城県柴田郡村田町大沼正治郎家文書)。

補注) \*1 小数点以下は10進法である。両以下の分・朱などの単位についても10進法に換算して表示した。帳面にある永貫匁・銀貫匁の記載も金に換算しに加工して表示した。京着値(買代金)の欄を除き、原則として小数第3位を四捨五入した。帳面に記載されている数値を尊重して表示したため、実計算とあわない箇所も若干みられる(例えば、一駄あたり買代金と買代金計の関係、個々の数値と合計の数値との関係など)が、そのままとした。

\*2 一は史料に記載がないなどの理由により不明であることを示す。( )を付した数値は、帳面に記載がないが他の数値から試算できる場合や帳面の記載者が後に修正したことがあきらかな場合に、その数値を示したものである。

\*3 京着値(買代金)の欄では、各紅花荷について一駄あたりの京着値が記載されている場合はそれを正体字で表示し、京着値が記載されておらず集荷段階の買代金(素上り)が一駄あたりで記載されている場合はそれを斜体字で表示した。京着値と買代金(素上り)の違いは、前者は後者に諸掛(役金・買口銭・荷造入用・京都迄の運賃など)を足した合計値であることに求められる。なお、集荷段階の買代金に諸掛の一部(例えば仙台城下までの運賃など)が加算された形で一駄あたりの数値が記載されている場合も若干みられるが、京着値と区別するためにそれらも斜体字で表示した。買代金計の欄においても斜体字の数値は、袋数÷64×京着値=原価をあらわすものではなく、諸掛を含まない買代金計(袋数÷64×一駄あたり買代金)をあらわすものである。

\*4 売代金計の欄では各紅花荷について、袋数÷64×一駄あたりの仕切値段の計算式で得られた金額から京都紅花屋の口銭(歩引ないし沓半引。仕切値段の1%ないし1.5%)を差し引いた手取金を記載している。京都に荷着した際に荷量不足から目欠引がなされた荷の場合は、さらに目欠引を差し引いた手取金を記載している。袋数÷64×一駄あたりの仕切値段の計算で得られる金額よりも売代金計の金額が若干ないし、しばしばかなり減少した金額となっているのはこのためである。

\*5 諸掛の欄には、紅花荷を出荷・売却した際に要した諸掛(役金・買口銭・荷造入用・京都迄の運賃など)を各集出荷形態毎に合計した数値を表示した。帳面では集出荷形態別に、紅花荷の個別記載が終わった末尾のところで諸掛を一括記載する様式をとっている。

\*6 原価計の欄には、帳面で合計されている各集出荷形態別の買代金計+諸掛=原価計の金額を表示した。すなわち、この原価計の数値は各集出荷形態毎に出荷した紅花荷合計の総原価を示すものである。なお、原価計の金額をその対象となった紅花荷の駄数で割った数値が各集出荷形態別の一駄あたり京着ならしの数値となる。帳面ではこの計算をしている場合もみられる(番号94~119の合計の備考欄を参照)。

\*7 売代金計の欄には、帳面で合計されている各集出荷形態別の売代金の合計額を表示した。

\*8 番号119の紅花荷は111に押込めて一括販売され、勘定された。表中の番号111の諸数値はいずれも119を含めた数値である。

\*9 他に為替分として、斎藤長松殿分(卯春出荷分。最喜殿行)㊤石山77袋・㊤猪王山28袋・㊤像鼻91袋、近江屋定吉殿分(卯3月。嶋屋清兵衛殿行)㊤極雨38袋、が書き上げられている。

\*10 帳面では1854年は年末まで嘉永7年と記載しているが、本表では便宜上安政元年と表示した(安政改元は嘉永7年11月)。

\*11 番号㊤~㊤の集出荷形態は帳面の記載順に表示した。商人名などの表記法も帳面のままとした。なお、「得可寿屋徳蔵」とは恵比寿屋徳蔵のことである。

に出荷時期別に整理した総括表である。これをもとに、安政元年の同家の紅花取引の全体的な動向について考察する。

まず、⑨長谷川家の紅花取引の量的規模を検証したい。表9の合計ⅡはⅣの帳面に記載された全荷の総計であり、二〇五五八袋（三二一駄一四袋）に達する。しかし、この荷数には前年に生産集荷された紅花（丑年花）を主体とする安政元年春為登分（小計⑧⑩⑪）が含まれており、単年度の集出荷数の算定としては相応しくない。そこで、この分を除外し、安政元年に生産集荷された紅花（寅年花）を主体とする同年夏⑬翌二年春為登分に限定して荷数の総計を算出したのが合計Ⅰである。合計Ⅰは一七九二四袋（二八〇駄四袋）であり、表2の合計に示した嘉永二年における同家の出荷総量一八三八一袋（二八七駄一三袋）とほぼ近似する出荷数であることが判明する。

出荷時期の順に紅花取引の実態を検討しよう。表9の《安政元年寅年春為登》にある最上紅花・奥州紅花小計（⑧⑩⑪）二六三四袋は、前年に集荷・荷造りした丑年花の残り荷であり、出荷期が越年した分である。最上紅花分の⑧の一〇九二袋は、内造り・天童高木屋造り・楯岡青沼惣次殿造りを合わせた荷数であると思われる。奥州紅花のうち⑩は仙台城下恵比寿屋徳蔵を通じて集出荷したもので、⑨長谷川家が仙台城下町商人を仲買として編成し奥仙紅花の集出荷を実現していたことが判明する。⑫は⑨長谷川吉内と、⑬は村田企大沼正七とのそれぞれ均等出資の組合形態により集出荷した奥仙紅花・南仙紅花である。注目されるのは、その利益の実態である。表8の各荷毎のデータから確認できるが⑧⑩⑪の最上紅花・奥仙紅花のなかには一駄あたり買代金（素上り）を仕切値段が下回った荷が少なくなく、また買代金を僅かに仕切値段が上回ったが諸掛を含めると原価割れとなる荷も多く、表9からあきらかなように⑧⑩⑪は総じて欠損となったことである。この背景には、嘉永六年の大干魃により紅花が不作で品質が低下したことが指摘できよう。表8でも⑧⑩⑪

の紅花荷は一駄あたり買代金や京着値が三二・五両以下の荷ばかりで、他の出荷時期の紅花荷と比較すると著しく低く、春為登という遅れ荷の悪条件も重なり、京都市場での仕切値段が低迷したため欠損となった。⑨長谷川家の集荷力をもってしても丑年花の品質確保は難しく、豊凶と相場変動の激しい紅花取引の危険性が露呈したケースとなった。

表9の《安政元年夏出荷》《安政元年寅年9月12月出荷》《安政2卯年春為登》は、寅年花の出荷分である。この三つの出荷時期をあわせた産地別の荷数・比率を計算すると、最上紅花（①⑦⑫⑬の合計）は八六七八袋で合計Ⅰの四八・四二％、奥州紅花（②⑧⑭⑮の合計）は七九一三袋で四四・一五％となる。庄内紅花（③⑥⑯）・総州紅花（④⑤⑩⑪）はそれぞれ表示した通りである。全体的な出荷状況がほぼ判明した嘉永二年（表2）と産地別比率を比較すると、最上紅花・奥州紅花の比率ともに増加し、この二産地合計で全体の九二・五七％を占める結果となった。嘉永二年の結果をもふまえるならば、嘉永⑬安政初年の⑨長谷川家の出荷はその八〇⑩九〇％を最上紅花・奥州紅花で構成するのがパターンであったと把握しうる。一方、その他の産地の紅花が占める比率は変化している。嘉永二年（表2）と比較して武州紅花の比率が著しく低下（一七・七一％→二・七八％）している点が注目でき、また常州紅花の代わりに総州紅花を買い付けるなどの変更がおこなわれている。同家が最上紅花・奥州紅花を主軸とする一方、他産地の紅花については荷量の比率を固定化せず、後述するように市況をふまえながら荷量を変化させている動向が検証される。

寅年花について出荷時期毎に動向を考察しよう。《安政元年夏出荷》のうち、最上紅花分における内造りの比重が高い点は従来と同様である。表9の③⑥については内造りと高木屋造りが併記してあるが、これは長谷川店・高木屋の双方で集荷・荷造りの実務を担当した紅花をそれぞれの組合形態で出荷したものであると把握できる。内造りのほか、天童高

木屋七兵衛、楢岡青沼惣次、江俣村鈴木屋長四郎が仲買をしている点も例年同様であり、なかでも高木屋が関わった荷数が多い。安政元年夏、翌春為登の紅花荷で高木屋が関与した③④⑥②②④の荷数を合計すると三三二三袋（五〇駄余。但し内造り分を含む）となり、合計Ⅰの一七・九八%となる。〔七〕高木屋が長谷川家を支える有力仲買であり、天童がその重要な集荷地として位置付いたことが指摘できる。②③⑥⑦は長谷川家と米庄殿・村田大沼正治郎・斎藤長松・鈴木屋長四郎がそれぞれ均等出資した組合形態によるもので、これら組合花の合計は二一七八袋となり、最上紅花（①⑦・②⑦・②⑦）合計八六七八袋の二五・一〇%、夏出荷分（①⑦・⑦）に限定すれば三三・〇四%を占める。嘉永五年（表7）

の夏為登最上紅花に占める組合花の比率一九・二〇%よりも増加しており、安政元年に長谷川家が最上紅花において組合形態による集出荷の比率を高めた動向が指摘できる。共同出資者のうち米庄殿・斎藤長松は新規の提携者であり、彼らは仲買の諸実務を担当していないので純粋に買付資金の共同出資者としての参加のケースである。嘉永五年（表7）の動向でも指摘したが、長谷川家が組み合う共同出資者を固定せずあらたな商人との提携による買付資金の増強・開拓を志向していたことがうかがえる。

表8の各荷の仕切値段が高値についたことから裏付けられるように、丑年花と比較して寅年花においては高品質の紅花集荷に成功したと把握できる。長谷川家の品質吟味による選抜買い付けの集荷方式が多用されたと考えられ、先述した灰光・佐印など良質銘柄（表8の番号1・5・15・16・32など）や天下一・日本一など高利益を出した銘柄が多数集荷されている。表9で産地別・各集荷形態毎に利益率の計算をおこなったが、夏出荷の最上紅花（①⑦・⑦）合計は一八・二一%をマークし、他産地紅花と比較しても奥州紅花・庄内紅花について高い利益率を達成したことがあきらかである。

庄内紅花については、連年通り⑧酒田鑑屋惣右衛門が仲買・荷造りを担当した。嘉永二年・同五年・安政元年の各データ（表2・表7・表9）では、庄内紅花の荷量の変化は一二七〇四一八袋の幅であり、全体の一二%を占めるにすぎない。しかし、利益率は嘉永二年が一六・〇二%、安政元年が一九・〇七%と好成績を残している。

武州紅花については、⑨桶川宿木嶋屋浅五郎、⑩江戸出羽屋喜兵衛が仲買・荷造りを担当した。彼らには買口銭・造り口銭が支払われていることがⅣの帳面から確認できる。⑩の紅花荷については「与野と江戸まで賃」の記載があり、この年の江戸出羽屋の集荷地が与野宿であり江戸商人を通じた集荷が武州紅花を主な対象としていたことが裏付けられる。関東紅花は早場物として仕入値（買代金）の相場が連年高くこの年も高水準であったが、表8に表示したように、⑨⑩の紅花荷の仕切値段は買代金をわずかに上回る値に決着したため、諸掛を含めると総じて欠損となっている（表9の⑨⑩の純益・利益率を参照）。先述したように長谷川家は安政元年に武州紅花の集荷量を例年になく縮小させたが、その背景には京都仕切相場——武州仕入相場の価格差があまり見込めず損益不明の市況判断があった。集荷量制限の判断は功を奏し、欠損を最小限（八両余）に抑える結果となったことが表9からあきらかとなる。⑪下総古河宿八百屋儀左衛門を通じて集出荷した同じ関東物の総州紅花なども仕切値段が振るわず、欠損は免れたものの二%弱の低利益率であり、紅花取引としては失敗に終わったのが実態であった。同一年度の出荷紅花でも、産地により高利益か、欠損かの分かれがあり、紅花取引の危険性に対するリスク管理を長谷川家も求められ対応した動向がうかがえる。

奥州紅花は遅場物であり、ここでは《安政元年夏出荷》《安政元年9月12日出荷》の奥州紅花分を一括して検討したい。まず、山形城下六日町市村屋五郎兵衛が⑫⑬⑭の南部紅花・奥仙紅花合計一五〇三袋の集出荷をおこなっていることが注目される。⑬⑭で「市村屋五郎兵衛殿

「引請」とあるが、おそらく当初市村屋が荷主として買い付けを約束していた荷物を⑩長谷川家が「引請」けたことを表現していると考えられる。IVの帳面より長谷川家は市村屋に買口銭を支払っており、表8に示したように荷印は⑩であることが確認できるので、「引請」以後は市村屋は通常の仲買同様の実務を担当したケースであると考えられる。表8の備考欄に記載したが、⑬では山川喜右衛門・土沢多吉なる産地商人に⑩長谷川家が買代金を支払っていることも確認できるので、市村屋から⑩長谷川家への荷物の「引請」が産地商人への買代金支払い以前におこなわれたことがわかる。また同欄に表示したが、⑭の産地は黒沢尻・水沢であったことが判明する。⑫⑬⑭の南部紅花・奥仙紅花の買代金の合計は九三二両余となり、資金繰りに詰まったなどの事情から市村屋が⑩長谷川家に「引請」を依頼したのであろう。表9の販売結果からあきらかのように、これらの紅花荷の品質は良く高利益を上げており、⑩長谷川家はその品質吟味をおこなった結果として「引請」を決定したことは想像に難くない。市村屋の事例は山形城下町の中堅商人が南部奥仙方面に進出し紅花集出荷を展開していたことを示すが、⑩長谷川家はそうした他の山形城下町商人の集荷ネットワークにも依拠し、彼らを仲買とし、時には彼らの荷物を「引請」る立場に位置していたことがあきらかとなる事例である。

⑮⑯⑰はいずれも村田商人を通じて南仙紅花を集出荷した事例である。⑮⑰は村田企大沼正七家が仲買・荷造りの実務を担当したもので、そのうち⑰は⑮企の均等出資Ⅱ組合形態で実施している。⑯は村田□山田屋新五郎が仲買・荷造りの実務を担当し、⑮二分五厘・企二分五厘・□五分の出資比率になる組合形態の集出荷である。⑮⑯⑰の南仙紅花は合計四九四七袋に達し、表9合計Ⅰの二七・五九%、奥州紅花(⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱)合計七九一三袋の六二・五二%を占める。⑩長谷川家の紅花集荷(とくに奥州紅花)にとつて村田商人が重要な基盤となっていることが明確と

なる。

表9からあきらかなように、《安政元寅年夏 出荷》《安政元寅年9〜12月 出荷》の奥州紅花(⑫⑬⑭⑮⑯⑰)の利益率は極めて高く一七〜二四%台(平均約二〇%)であり、産地別ではトップの利益率であったことが判明する。純益合計(不明の⑭を除く)は一〇三八・〇八両となり、最上紅花(①②③④⑤⑥⑦)の純益合計八七五・四七両を上回り、安政元年における⑩長谷川家の紅花取引の第一の利益源泉が奥州紅花販売であったことが検証できる(但し、組合形態の紅花荷の純益を含む。各組合花の出資比率をふまえて⑩長谷川家単独の純益合計を計算すると奥州紅花八一四・三八両、最上紅花七二二・三三両となる)。

つぎに、《安政2卯年春為登》の紅花荷について検討したい。その荷量は小計(②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱)の三三四四袋となり、単年度に集荷した紅花荷(合計Ⅰ)の一八・六六%が越年して出荷されたことが判明する。最上紅花分(②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱)は内造り・天童高木屋七兵衛・寒河江八幡屋・楯岡青沼惣次による集出荷であり、いずれもこれまでの検討で登場した商人や干花生産者である。奥州紅花分(⑮⑯⑰⑱)は⑩長谷川吉郎治・企大沼正七・⑩長谷川吉内(三者均等出資による組合形態で集出荷したもので、奥仙米屋喜十郎・仙台城下恵比寿屋徳蔵が仲買・荷造りの実務をおこない仙台城下へ集荷した後)に京都へ出荷された。「大沼孫次郎殿出張二而買調」とあるように大沼家が買い付けのイニシアチブを執ったこともわかる。なお、《安政2卯年春為登》の紅花荷に関しては、IVの帳面に仕切値段など販売結果が記されておらず利益率も算出できない。

奥州紅花に関してまとめるならば、表9から、安政元年の⑩長谷川家は村田(大沼家・山新家)や仙台城下(恵比寿屋)などを拠点に、山形城下町商人(市村屋)のネットワークをも活用しながら産地商人から南仙奥仙紅花を手広く買い付け、高利益をあげたことがあきらかとなった。また、安政元年夏〜翌二年春為登の奥州紅花(⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱)合計七九一



三袋に占める組合紅花(⑩⑪⑫)の比率は四四・二九%であり、先に分析した嘉永二年(表2)の同比率七九・九七%に比較すれば低い。他産地紅花と比較すると高い比率を継続している。⑬長谷川家が奥州紅花の集出荷を共同出資Ⅱ組合形態を多用して実施したことが複数年のデータから検証できた。

以上、安政元年の紅花取引の実態について考察してきた。表9からあきらかなように、⑭長谷川家は判明するだけでも単年度(安政元年春為登分を除く)に一三六七・〇七兩を投下し、そのうち夏々年末出荷分のみで一九四一・二一兩の純益を得る巨大な紅花取引を実施していたことが判明する。

嘉永二年の実態分析から検証できた奥羽・関東の各産地を覆う広域的な集出荷機構は、安政元年にも確認でき機能したことがあきらかである。表1と表9に掲載した羽州村山郡をはじめ南部・奥仙・南仙・仙台・武州・総州・江戸の仲買商人や共同出資者は、いずれも各産地の有力商人であり、単独荷主としても京都市場へ活発に紅花出荷をおこなっていた家が多い。嘉永三年の水沢穀田屋七平の事例から組合形態における集出荷の構造を考察したように、これら各地の有力紅花商人は現地の小商人・生産者とのネットワークを形成し紅花買い付けを実現していた。奥羽・関東の紅花産地・市場において⑭長谷川家は、これらの有力紅花商人を仲買として編成し、彼らの背後にいる無数の産地小商人・生産者の上に聳立する巨大な商人資本として活動していたといえる。

## おわりに

本稿の考察により、嘉永く安政初年における⑭長谷川家の紅花出荷総量が(組合紅花を含めて)二八〇駄前後であることが複数年(嘉永二年・安政元年)のデータから得られた。明治期に農商務省農務局が調査した

近世末年頃の全国紅花生産高は二〇〇〇二四〇〇駄(うち最上紅花六〇〇〇一二〇〇駄)と推計されていることをふまえるならば、同家は全国生産高の凡そ一二・一四%を取り扱う全国随一の巨大紅花商人であったことが指摘できる。

⑭長谷川家の最上紅花の出荷数に関しては、本稿の分析より、嘉永二年は七九四九袋(一二四駄一三袋。表2 同年一二月出荷分を含む)、嘉永三年は八〇八七袋(一二六駄二三袋。表4 同年夏為登分のみ)、嘉永五年は四三三四袋(六七駄四六袋。表7 同年夏為登分のみ)、安政元年は八六七八袋(一三五駄三八袋。表9の①⑦・②⑦の合計)という連年のデータが得られた。大量の夏為登荷となった嘉永三年の出荷数は秋々翌春為登の最上紅花分を含めるとより多量となると推定されることや、同五年の荷数は出荷量が縮小された年のものと考えられること、安政元年の出荷数が夏々春為登の単年度の全荷量を最も反映している数値であることなど各データの性格を考慮するならば、同家は嘉永く安政初年に八〇〇一五〇駄前後、平均すれば一二〇駄前後の最上紅花を出荷していたと推定され、近世末の最上紅花生産高の凡そ一〇・二〇%を取り扱う村山郡最大級の紅花商人であったことが指摘できよう。

本稿の分析から注目されるのは、⑭長谷川家の紅花取引における蓄積様式とリスク管理のあり方である。安政元年の武州紅花の集荷動向から判明したように、同家は市況から損益予測が悪い産地紅花については集荷量を抑制し、高利益が見込まれる産地紅花(寅年花の場合、最上紅花・奥州紅花)の集荷量の比率を増加させて、全体として高利益を確保することに成功している。こうした対応が可能であったのは、同家が広域的な集出荷機構を形成し各産地に足場を築き、年毎に産地間の荷量調整(産地の選択や投下する買付資金額の調整)をなしえる体制を築いていたことに求められる。また、組合形態を多用することで⑭長谷川家単独では入りにくい産地に集荷ネットワークを形成し、また買付資金を増強する

ことができた。組合形態は共同出資者と損益変動のリスクを共有する形態であり、参加商人の能動性を引き出すとともに⑩長谷川家にとってはリスクを分散する機能を果たした。豊富な買付資金の確保による大量集荷の継続的展開は、各産地商人や干花生産者との取引関係を強固にし、良質銘柄・高品質の紅花買い付けを有利に、かつ他の商人に先駆けて優先的に集荷を進める条件を形成した。同家の品質吟味による選抜買い付けの集荷方式の多用により、最上紅花をも含めて同家出荷の紅花は相対的に高い利益率を達成した。集荷における品質管理の進展は同家の帳簿様式の整備をともなった商品価格管理の基盤ともなり、同家の京都紅花市場における売り付け交渉を有利に進める結果を生んだととらえられる。これらの諸点に、他の中小商人や豪農クラスとは隔絶した経営規模である巨大商人の蓄積様式の特徴が指摘でき、⑪長谷川家が紅花取引において高収益を確保した条件が検証できるといえる。

⑫長谷川家は、藩専売制など藩権力の経済統制と結びつき領内の商品流通を掌握したいいわゆる特権商人とは異なる蓄積様式をもち、他藩領の商人とも共同出資の組合形態による集出荷を実施し、幕藩領主支配の別なく広域的な経済活動を展開した点に特色がある。こうした特色は⑬⑭両長谷川家をはじめ、山形城下町の巨大商人に共通してみられると考えられる。いわゆる非領国地帯である羽州村山郡の商都山形城下町が奥羽の中継商業地として発展した政治的経済的な諸条件については別稿でスケッチを試みたことがある。本稿の分析は⑮長谷川家の紅花取引の分析から、幕末期における山形城下町商業の特性に関する考察をおこない、その巨大な商人資本の広域的な活動実態について具体的な論証をおこなった。<sup>19</sup>

なお、本稿は筆者の荷主帳簿論のいわば第三作にあたる。<sup>20</sup> 本稿で検討した〈紅花等元揚調帳〉は紅花生産地帯における集出荷商人のいわば価格管理帳であるが、他の商品生産地帯における集出荷商人（荷主）と遠

隔地間取引商人においても同様の機能をもつ商品価格管理の帳面を作成・活用していたと思われる。本稿では、個別荷の着値・値打・仕切値の關係分析を方法として巨大紅花商人の売買と利益実態を分析し、連年の産地別の集出荷量や集出荷形態・方式および利益率の変化を総合して考察することで巨大商人の蓄積様式とその取引実態の検討を試みた。<sup>21</sup> こうした分析方法は、他の商品生産地帯における集出荷商人（荷主）と遠隔地間取引商人の取引実態の分析にも採用しうるのでないかと考えている。幕藩制の市場における商品価格形成のヘゲモニーに関する実態的な検討の重要性については以前に問題提起をおこなったことがあるが、<sup>22</sup> 各地の比較検討をもとにした議論が展開することを期待している。

#### 注

(1) 今田信一『最上紅花史の研究』（井場書店、一九七二年）。とくに、二三八～二三九頁。なお、今田氏は「両長谷川家の場合などは、荷問屋として取扱った紅花の量は、村山郡内生産のものよりも仙南地方のものが遙かに多」いと結論づけている（同書五一～六頁）が、本稿の全体的な実態分析からあきらかになるように誤りである。

(2) 岩田浩太郎「紅花商業と東北」（『山形大学公開講座 山形の魅力再発見 報告集』山形大学都市地域学研究所・山形県生涯学習文化財団、二〇〇三年）で、⑩長谷川家の広域的な紅花取引の実態と南奥羽に対する中継商業都市として繁栄した山形城下町の歴史的條件に関するラフ・スケッチを試みた。本稿の論証作業の背景にある筆者の山形城下町および商人研究の当面の課題意識や見通しについて述べている。本稿の予備的論稿としての位置にあるので、あわせて参照されたい。また、筆者の豪農論・地域社会論における山形城下町巨大商人研究への視点や関心については、同「豪農経営と地域編成（二）」（後掲注（12））の注（47）を参照されたい。

(3) 宮城県柴田郡村田町字町大沼忠・悦子氏（正）商店 所蔵大沼正治郎家文

書。二〇〇二年五月から奥羽史料調査会により調査を実施している。

- (4) 横山昭男「近世後期における紅花流通と城下町商人の存在形態——最上紅花問屋佐藤家を中心として——」(『歴史の研究』第一四号、山形歴史学会、一九七二年)、前森礼介「幕末期における城下町商人の一考察——山形佐藤利右衛門家にみる店経営——」(『山形史学研究』第一〇号、一九七四年)が山形十日町の今佐藤利兵衛家(本家)・④佐藤利右衛門家(分家)の経営分析をおこなっている。

- (5) 岩田浩太郎「商品流通と『着値』——遠隔地間取引における荷主の価格計算・損益管理——」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇三集、二〇〇三年)。京着値をはじめ「着値」の概念と市場取引における機能につき考察し、遠隔地間取引における荷主の原価積算および損益管理の方法として広く近世社会で通用していたことをあきらかにした。本稿は、幕末期における山形城下町最大の商人であった⑤長谷川家もこの方式を採用していたことをあきらかにし、前稿の論証をさらに補強する位置にもある。

- (6) この紅花荷は一九袋入の荷四丸と一八袋入の荷三丸に荷造りされたことが記載からあきらかである。荷造りした形状からは合計一三〇袋となり、帳面に記載された袋数と一袋分勘定が合わない。その理由は帳面からは不明であるが、一袋(五〇〇匁)に満たない端数が存在し、数え方により袋数が異なってくるケースはしばしばみられる。

- (7) このことは、IVの帳面の筆跡や余白の取り方などの検討から判明する。表8の集出荷形態の番号⑩以降において一駄あたり仕切値段や売代金計の欄が空白であるのは、これらの紅花荷が安政元年春に上方へ出荷されたものであり売却時期が遅れ、売却の結果がこの帳面には記入されなかったためと推察され、帳面のこれらの頁は各紅花荷の記載の間に余白が充分にとられたままとなっている。このことは、帳面を作成した当初においては売却結果の情報を余白部分に書き込むことを意図していたことを明示している。

- (8) 長谷川博明氏(現⑥長谷川家ご当主。山形市十日町長谷川商店)のご教示によれば、長谷川吉六は二代目吉郎治の次男である。長男(吉六の兄吉治)が弘化四年(一八四七)に亡くなったため、跡取りとして⑥長谷川家の商業実務を担った。しかし、このIVの帳面を作成した直後の安政二年(一八五五)四月一三日、在京中に亡くなっている。享年三七歳。

- (9) 大沼悦子『紅花と村田の一人』(自費出版、一九九七年)。大沼悦子氏のご教示による。正初代大沼正治郎は寛政二年(一八〇〇)生まれであるので、嘉永期には五〇歳前後である。嘉永二年頃に分家正大沼家を創出したとされる。嘉永く安政期に正治郎は、山形城下町の角屋正太郎とともに⑥⑦両長谷川家の上京支配人としてたびたび在京し、⑥⑦両長谷川家の紅花荷の売却を担当し、さらにその売代金を使用した上方商品の買い付けなど、両長谷川家の上方取引の差引勘定Ⅱ「のこぎり商い」の資金回転にも深く関与していた。

なお、企正「両大沼家の経営については、二〇〇四年九月一八日に村田町古文書調査報告会「村田商人の歴史をひもとく——大沼家文書調査から——」(村田町教育委員会・奥羽史料調査会主催、於村田町中央公民館)において「大沼家の紅花取引と商業活動——村田商人の全国取引——」と題して報告をおこなった。詳細の刊行は後日を期している。

- (10) 山形大学附属図書館所蔵最上屋喜八家文書。

- (11) 岩田浩太郎「紅花商業と東北」(前掲注②)の表1で、同データを使用した概括的分析を試みたことがある。しかし、集出荷形態の詳細(組合形態の具体)や純益・利益率などのデータは紙幅の都合から割愛していた。

- (12) 岩田浩太郎「豪農経営と地域編成(二)——全国市場との関係をふまえて——」(『山形大学紀要(社会科学)』第三三巻第一号、二〇〇二年)。文化八年(一八一)く天保二年(一八四一)の京都紅花相場変動のデータ分析による考察であるが、この傾向は嘉永く安政期にも継続したと考えている。

- (13) 表2小計の純益七八九両余は原価・代金の両方が判明した紅花荷に限定

して計算できた数値であることや利益率が高いと予測される奥州紅花の純益が含まれていないことを考慮して嘉永二年の④長谷川家の紅花販売における総純益を推察するならば、大凡一三〇〇〜一五〇〇両に達したと思われる。

(14) なお、表3の番号39は南仙紅花であり、内造り分の一部は羽州村山郡以外の地域から集荷され混入されたケースも確認できる。なお、後掲表6の番号25も内造り分に混入された奥仙紅花であるが、「奥仙と商人持参候分当所二而買入」と記載されているように山形に持ち込まれた後に内造り分として長谷川店が購入した過程が判明する。

(15) 河北町誌編纂委員会編『大町念仏講帳 河北町誌編纂史料』（河北町、一九九一年）三八一〜三八六頁。例えば羽州村山郡谷地郷では、日照り干魃のため畑作・稲作ともに不作となり、干花の地払い値も嘉永六年七月より以降は「格別下値」となったことが確認できる。

(16) ただし、組合形態における共同出資者の出資分も含めた金額である。表9より、組合形態の共同出資率をふまえて、寅年花の集出荷のために④長谷川家単独で投下した資金を不明分(⑭)を除いて試算すると、一一〇二七・四〇両となる（自己資本率八〇・六六％）。全投下資金の一九・三四％が共同出資者の出資額であり、二六四三・六七両にのぼる。

(17) 今田信一『最上紅花史の研究』（前掲注(1)）三四頁。

(18) 岩田浩太郎「紅花商業と東北」（前掲注(2)）。

(19) なお、本稿で指摘した諸商人のほかに、奥仙山ノ目鈴木屋庄左衛門・一関大町千葉新助・水沢大町小沢屋平治が嘉永期に④長谷川家の紅花買宿であつたことが確認できる（山形大学附属図書館所蔵二藤部兵右衛門家文書「御徳得名前問屋名前留」）。また、I〜IVの帳面には、紅花荷の記載の後、青芋荷や生糸荷に関する記載があるが、本稿では紙幅の関係から分析できなかった。今後の課題としたい。

(20) 岩田浩太郎「堀米四郎兵衛家における紅花出荷の動向——『萬指引帳』の

基礎的考察——」（『西村山地域史研究会十五周年記念論集 西村山の歴史と文化Ⅲ』西村山地域史研究会、一九九六年）、同「商品流通と『着値』」（前掲注(5)）。

(21) なお、京都を中核とする三都紅花市場Ⅱ中央市場における取引諸条件や各産地小商人・生産者の価格形成力Ⅱ価格要求と巨大商人との関係などの実態分析をあわせておこなう必要がある。今後の課題としたい。

(22) 岩田浩太郎「商品流通と『着値』」（前掲注(5)）。世直し状況論の批判的継承の課題、とくに「幕藩制的市場関係の規定性」の実態的な吟味の課題に関わる。

（付記）本稿の分析史料に使用させていただいた大沼家文書の奥羽史料調査会による調査に際して、大沼忠・悦子ご夫妻、大沼正七氏に大変にお世話になった。記して謝意を表したい。なお、本稿は二〇〇四年度人文学部プロジェクト研究「交易・交流からみた出羽の歴史文化——山形の地域特性の歴史的形成に関するフィールド研究——」の成果の一部である。研究会で同プロジェクト参加メンバー諸氏から貴重な意見をいただいた。

## **Research into the actual circumstances of benibana trade by the Hasegawa Kichiroji family, a large merchant in the Yamagata castle town during the late Edo period**

IWATA Kotaro

(Professor, History & Culture, Cultural System Course)

Yamagata during the Edo period developed as a special area for the cultivation of benibana (safflower, a plant used as the raw material of benibana dye, lipstick and cooking oil) and prospered through benibana sales to Kyoto, Osaka and elsewhere. It is thought furthermore that merchants and wealthy peasants developed through transit commerce by purchasing stocks of everyday commodities from Kyoto or Osaka and selling them throughout the lands of Mutsu and Dewa (current Tohoku area). Yet there has been virtually no progress in research into the actual circumstances surrounding the commercial activities of merchants in the Yamagata castle town, who were undoubtedly the most active in the benibana trade. In this study, I clarify the actual circumstances of benibana trade engaged in by the Hasegawa Kichiroji family, the largest merchant in the Yamagata castle town during the late Edo and the beginning of the Meiji periods. Business ledgers dealing with the Hasegawa benibana trade were discovered among old documents in the possession of the Onuma family in Murata Town (currently Murata Town, Shibata Gun, Miyagi Prefecture), which at the time was part of the territory of the Sendai han (domain), providing new historical resources that served as the basis for my research.

Through this research, I clarified that, during the periods of Kaei and Ansei (1848-59), the Hasegawa family collected some 280 loads of benibana a year and sold them in Kyoto and Osaka. Total annual benibana production in Japan at the time was 2,000 loads, which means that the Hasegawa family handled a share of about 14%, likely making it the largest single benibana merchant in Japan at the time. The Hasegawa family collected benibana cargo from a broad area encompassing the Murayama area (current Yamagata Prefecture interior) and the Shonai area (Japan Sea coast area of Yamagata Prefecture) in the land of Dewa as well as the Nanbu area (Iwate Prefecture), Okusen area (northern Miyagi Prefecture and southern Iwate Prefecture) and Nansen area (southern Miyagi Prefecture) in Mutsu together with areas in the lands of Hitachi (Ibaraki Prefecture) and Musashi (Saitama Prefecture) and in Edo (Tokyo Prefecture). I reveal that they collected cargo using local influential benibana merchants as purchasing agents and also collected cargo jointly by establishing partnerships with them. In this study, I present a basic review including a verification of benibana shipment volumes by the Hasegawa family, sales prices in Kyoto and Osaka, profits earned and other factors. This research is significant in that it provides a more clearly defined elucidation of the actual circumstances surrounding benibana trade by merchants in the Yamagata castle town, which has long been delayed, in a case study dealing with the largest merchant.